



Title	ウイグルから見た安史の乱
Author(s)	森安, 孝夫
Citation	内陸アジア言語の研究. 2002, 17, p. 117-170
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/17824
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ウイグルから見た安史の乱

森 安 孝 夫

- 第1節 中央ユーラシアより見る世界史
- 第2節 ウイグル文典籍断片 Mainz 345 の紹介
- 第3節 ウイグルと安史の乱 (年譜)
- 第4節 ウイグル文典籍断片 Mainz 345 の推定復元
- 第5節 ウイグル文典籍断片 Mainz 345 の歴史文献学的意義
- 第6節 早すぎた征服王朝としての安史の乱とウイグル

第1節 中央ユーラシアより見る世界史

2002年3月2日、東京駒込の(財)東洋文庫において開かれた内陸アジア出土古文文献研究会において、私は「ウイグルから見た安史の乱——早すぎた征服王朝」という視点からのユーラシア史——と題する研究発表を行なった。「早すぎた征服王朝」という表現は、この数年来、私が大学の講義や研究会の席上で使い始めたものであるが、この場合の「征服王朝」とは、我が国の東洋史学界や中等教育の現場において人口に膾炙しているそれと同じであって、遼・金・元・清という4つの王朝のことである。⁽¹⁾つまり私はこの発表で、中国と北～東北アジアを包含するユーラシア全体の歴史の流れにおいて遼(契丹)王朝が一つの大きな画期であったとする考えを認めつつも、それには先行する雛形がいくつもあったのだという点を強調しようとした。

かつて私は「渤海から契丹へ——征服王朝の成立——」(森安1982)と題する概

(1) 人口に膾炙している好例として、この言葉を日本に普及させた一人である田村実造自身の手になる『アジア歴史事典』巻5(平凡社、1960)の「征服王朝」の項が挙げられる。

説論文の中で、「海東の盛国」と呼ばれた渤海が征服王朝としての遼朝成立に直接及ぼした強い影響を指摘した。それに加えてこの度は、安史の乱を担った中央ユーラシア的勢力（中央ユーラシア出身のトルコ系・モンゴル系の遊牧騎馬民族やソグド人、及びその混血や後裔など）の動向が遼（契丹）王朝にまで間接的とはいえ確実に続いているのであるという見方を提示した。⁽²⁾

従来ほとんどの場合、安史の乱は中国史の側からマイナス評価を与えられてきたのであるが、私はユーラシア史の側から安史の乱に積極的なプラス評価を与えようとしている。本稿の大きな目的の1つはそこにある。そしてさらに、唐朝に味方して安史の乱を「つぶした」とされるウイグル（廻紇・回鶻）についても、別の評価がありえることを主張する。換言すれば、征服王朝としての遼（契丹）王朝の雛形として、渤海と安史の乱勢力、そしてウイグル（東ウイグル可汗国）の三者があったのであり、しかもその趨勢はユーラシア全体の必然的な歴史の流れ（長期波動）であった、という考えを提出したいのである。

近代以前のユーラシア史、すなわち事実上の世界史において、中央ユーラシア草原地帯から興起した遊牧民族、とりわけ遊牧騎馬民族（より正確には遊牧騎射民族）の果たした役割が極めて大きかったことは、我が国の東洋史学界ではもはや常識といってよいであろう。最近では「中央ユーラシアより見た世界史」が構築できる、否それこそを構築すべきであるという主張さえ、決して奇矯ではなくなりつつある。⁽³⁾生産力・購買力と並んで歴史を動かしてきた大きなモーメントは軍事力である。紀元前一千年紀初めに中央ユーラシアの乾燥した大草原地

(2) つい最近、安史の乱ないしそれに先行する康待賓・康順子の乱を担った中央ユーラシア的勢力を「ソグド系突厥」とか「ソグド系トルコ人」という名称で捉える若干研究者が同時に3人も現われた。それは森部豊（筑波大学）、齋藤勝（東京大学）、中田裕子（龍谷大学）の諸氏である。このネーミングは全く偶然に一致したものであり、3人それぞれにオリジナリティがある。いずれも個人的なコンタクトによって知り得た情報で、論文が公表されているわけではないので、今後注目したい。

(3) Cf. 岡田 1990；岡田 1991；岡田 1992；杉山 1992；杉山 1993；森安 1996；杉山 1997a；杉山 1997b。なお、中国史の方からさえ、妹尾 1999 や妹尾 2001 のような画期的著作が現われている。

帯に遊牧騎馬民族が登場し、地上最強の騎馬軍団を擁するようになってから、⁽⁴⁾ 彼らの動向が世界を動かす原動力となったのは自然であった。

近代人の眼には、中央ユーラシアは東アジア、南アジア、西アジア、そしてヨーロッパという大農耕文明圏の外にある辺境と映ってきた。しかし、視点を変えれば、中央ユーラシアの「周辺」にこそそれらの大文明圏が位置していたといえる。⁽⁵⁾ それ故に、中央ユーラシアは、その「周辺」に散らばる生産力・購買力豊かな文明圏を繋ぐ大動脈の役割を果たし得たのである。その大動脈がいわゆる「シルクロード」である。このシルクロードによって周辺からヒト・モノ・カネや情報が流入し、さまざまな言語・文化・宗教の渦巻く巨大な坩堝となって、中央ユーラシア自身も変容しながら周辺世界に多大の文化的影響を与えてきたことはいうまでもない。

つまり中央ユーラシアは、近代以前の世界における最強の軍事力の保持を背景に世界史を動かし続けただけでなく、シルクロードという「東西南北」(決して「東西」だけではないことに注意)に通じる交通路を内包することによって、経済的にも文化的にも世界に大きな影響を与え続けてきたのである。確かに騎馬軍団の中央ユーラシア的勢力は、銃火器を持つ近代ヨーロッパ諸勢力に屈した。しかし、中央ユーラシア世界がそれまでの二千年以上に亘って果たした世界史的意義は、改めて確認すべきであろう。

さて、世界史を以上のように捉え直す立場からすれば、元来は中央ユーラシア出身の騎馬集団が「南方」の農耕地帯に入り込んで建設した政権や王朝が、実はいくらでも存在していたことに気付かれるであろう。もしこれらをも「征服王朝」という、いささか曖昧ではあるが便利な術語で呼ぶとすれば、クシャン(クシャーナ)朝、パルティア帝国、五胡十六国の大部分、ゲルマン諸王国、フン帝

(4) さらに中央ユーラシアには、その西部のウクライナ草原～コーカサス地方にインド＝ヨーロッパ語族の発祥の地があり、東部のモンゴリア～満洲にいわゆるアルタイ系諸民族の故郷があったことも忘れてはならない。

(5) Cf. Sinor 1990, p. 2.

国、北魏、エフタル、東魏、西魏、北齊、北周、隋、フランク王国はおろか、⁽⁶⁾
アケメネス朝ペルシア、アレクサンドロス帝国、ササン朝ペルシア、唐朝さえ
もがその範疇に入ってしまうのである。この認識は、19世紀以降、近代ヨー
ロッパ諸国の手によって彼らに都合のいいように作り上げられてきた世界史像
には全く通用しない。我々は歴史認識に大きな転換を求めているのである。

ところで「征服王朝」という用語は、アメリカのウィットフォーク K. A. Wittfogel が、文化変容理論に立脚して中国史上の政治・社会・文化における「二元性」に着目し、遼・金・元・清朝を他の諸王朝と区別するために提唱したものである。しかし、その背景には欧米中心史観の裏返しである東洋的停滞論が残っていて、もはや原義に固執する必要はなくなっている。というのも、我が国では早くから原義を離れて拡大解釈され、いまやこの術語には、北方民族の成長・発展の一段階を示すものとして遼・金・元・清朝という4つの東ユーラシア王朝をさす狭義の用法と、より一般的な、中央ユーラシア出身の騎馬民族（時に中央ユーラシアに含まれない西アジア南部の半砂漠地帯の騎駱駝民族）が農耕民とそれに寄生する都市民から成る国家や地域を軍事力で征服し、以後も軍事的優位を維持して支配している国家ないし王朝という広義の用法とが混在しているからである。⁽⁷⁾ なお、広義の征服王朝には、ウィットフォークが遼・金・元・清朝と区別して「浸透王朝」と名付けた北魏も、当然ながら含まれる。征服王朝という用語はその便利さゆえに今後も使い続けられるであろうが、ただその両義性にはくれぐれも注意を払うべきである。

五大陸（ユーラシア、アフリカ、北アメリカ、南アメリカ、オーストラリア）でただ

(6) 護 1980, p. 11 は、征服王朝をひろくとれば、ウマイヤ朝・セルジューク朝・ティムール朝、オスマン朝などもその範疇にいれてさしつかえないであろうという。江上 1987, pp. 233-251 は、大月氏＝クシャン朝を征服王朝国家として活写する。妹尾 2001, p. 42 は、フランク王国・ウマイヤ朝・北魏～隋を一種の征服王朝といってよいだろうと指摘する。

(7) 両義性を持つに至った「征服王朝」という術語の定義の変遷、ないしそれと表裏の関係にある遊牧騎馬民族史における発展の理論については、前掲の田村執筆の事典項目の外、村上 1951、長沢 1962、護 1970、吉田（順）1973、村上 1980、護 1980、及びそこに言及される諸文献を参照。

一つ、馬という大型有蹄類に恵まれ、まず西アジア起源の車輛と組み合わせた馬車を開発し、それを戦車に仕立て、遂には騎馬技術を発明して遊牧騎馬民族を生み出したユーラシアの歴史においては、広義の征服王朝型国家がヘゲモニーを握ってきた。もちろん、広義の征服王朝であるから、その内実には相当程度の差が認められ、単純な歴史の「発展」をいうことはできない。例えば、クシャン朝と北魏と遼朝を比べて、いずれが進歩した形態であるとか、逆に遊牧民族には歴史的発展はなかった、などと論じることは無意味である。とはいえ、9～10世紀のユーラシアには東から順に遼朝、沙陀諸王朝（五代のうち後唐・後晋・後漢の3王朝）、西夏王国、甘州ウイグル王国、西ウイグル王国、カラハン朝、セルジुक朝、ハザル帝国など、同じ様なタイプの征服王朝がずらりと並び立ち、さらにその西にややタイプは違うとはいえやはり征服王朝の範疇に入れてさしつかえないフランク王国があるのを見れば、ここがユーラシア史上の大転換期であったことは、誰しものが認めざるをえない。すなわち、紀元前9世紀頃以降の長い時間をかけて、豊かな農耕・定住地帯への掠奪・征服あるいはその住民との協調・融和・同化に成功と失敗を繰り返してきた遊牧騎馬民族が、9～10世紀に至ってついに、大人口の農耕民・都市民を擁する地域を少ない人口で安定的に支配する組織的なノウハウ（軍事的支配制度、税制、人材登用制度、商業・情報ネットワーク、文字の導入、文書行政、都市建設など）を完成することができたのである。それらのノウハウのいくつかは既に生み出されていたものであり、それらを支える最大の基盤は、遊牧騎馬民族の軍事力とシルクロードによる財貨の蓄積であった。しかしながらそれだけでは支配は一時的に終わってしまい、より安定した強固な征服王朝を維持するには不十分である。そのために必要だったのは、いくつもの要素が複雑に絡み合った「システム」の構築であったと思われる。

そうした「システム」の構成要素をえぐり出す作業はまだこれからの課題であるが、⁽⁸⁾少なくともその一つに、高度な行政システムには欠かせない文書行政が

(8) 突厥・ウイグルについてモーリス氏が指摘している点も参考になる。Moses 1976, pp. 62-64.

あったことは確実である。その際、それを可能にするブレンやスタッフが、日常的に文字を使ってきた先進文明圏の役人や商人や宗教者の中からリクルートされたことはほぼまちがいなкаろう。ここにいう商人とは、遠隔地貿易に携わる移動商人や倉庫業・旅館業・金融業などに携わる都市の商人をさす。彼らにとって手紙や契約文書や帳簿の作成は日常茶飯事であった。また宗教者とはプリミティヴなシャマンなどではなく、仏教・マニ教・ゾロアスター教・キリスト教・ユダヤ教・イスラム教といった創唱宗教の僧侶・指導者や信徒であり、彼らにも文字文化は身に付いていた。移動する商人や宗教者は、時にスパイとさえなり得るほど多様な情報の持ち主であった。文書行政は郵便・駅伝制度などの迅速な情報伝達網に支えられた時、一層効力を發揮する。それは日常的に馬を扱う騎馬民族にとっては最も得意とする分野であり、その迅速性が文書行政に果たした役割の大きさも見落としてはならない。

人口の少ない「北方」の遊牧騎馬民族が、従来からの本拠地である草原に足場を残しながらも、「南方」に位置する都市や農耕地帯を支配する征服王朝を一举に出現させたのは、決して偶然ではありえない。長い歴史を経た「北方」勢力の水準が、武力のみに頼るのではなく、文書行政を通じて直接・間接に「南方」を支配するシステムを構築できる段階に至っていた、だからこそユーラシア全域に亘ってほぼ同じ時期に同じ様な現象が見られたと考え、そこに歴史的必然性（長期波動）を見出すべきなのである。

私は先に「ユーラシア史の側から安史の乱に積極的なプラス評価を与えたい」と述べた。それは安史の乱が、この9～10世紀に全ユーラシアに亘って認められる歴史的動向に連動するもの、より正確に言えば先行する事象であったと認めるからなのである。もし安史の乱が成功していればそれは安史王朝となっていたであろうが、いかんせん8世紀にはまだそうなる基盤が十分には整っていなかったと考えるのである。

安史の乱の原因を、安祿山に対する玄宗の恩寵の失墜とか、安祿山と唐朝の皇太子や宰相・楊国忠との確執とか、「胡化」した河北地方の住民が中央から冷

(9) Cf. 堀 1951, pp. 63-66.

遇されていた結果とか、⁽¹⁰⁾ 雑胡(あいのこ)と差別された劣等感などに求める中国史の立場からは、安史の乱の本質は見えてこないであろう。安史の乱はもとより、安史の乱に先行する康待賓・康順子の乱を担ったのが実はいずれも「ソグド系突厥」とか「ソグド系トルコ人」と呼ばれるべき中央ユーラシア的勢力であったこと、さらにはそれらを鎮圧する側の唐の軍隊でさえその中核は同じく中央ユーラシア出身の遊牧騎馬民族であった。このことに改めて注意を喚起した功績は、前注2に言及した森部・齋藤・中田三氏に帰せられるべきであるが、何事も「同化」の過程とみなす中華主義的先行研究との差異を明白にする、より具体的な論証はやはりこれからの課題である。[補注1]

では、当時の中央ユーラシア的騎馬民族を代表する勢力となっていたモンゴリアのウイグル民族(東ウイグル可汗国)の目には、安史の乱はどのように映っていたのであろうか。最終的に唐側に就くことによって安史の乱敗北の趨勢を決定したのが、「北」のウイグル勢力であったことは周知の事実である。しかしながら、あくまでそれは結果論であって、ウイグルは終始一貫して唐側に就いていたわけではない。ウイグルは、「南」で覇権争いをしている唐朝と安史勢力の動向を両天秤にかけながら、自己の政策を決定していたようである。このあたりの状況は、従来は漢文史料のみから論じられてきたのであるが、私は1999年に文部省在外研究員としてベルリンに滞在中、トゥルフアン出土文献の中からウイグル自身が安史の乱について書き残したウイグル語史料を発見することができた。⁽¹¹⁾ それは小さな典籍断片であるが、基礎的史料が少ない分野ではどんな断簡零墨でもゆるがせにできない。本稿は、まずこの紹介を中核に据える文献学的研究であるが、テキストを復元し、その意義を考察する部分には、本節で述べたような我々の歴史観が色濃く反映されることになる。

(10) 安禄山は、プーリイブランク氏が言うように(プーリイブランク 1952a, pp. 47-50; 杉山 1997a, p. 250), 由緒正しいソグド人の武将一族の出身で、その一族は突厥などでも活躍したものである。従って、安禄山は突厥とソグドの「雑種」で、いかにも被差別民であったという中華主義的見方は大きく変わらざるをえない。

(11) Cf. 森安 2000a, p. 132.

第2節 ウイグル文典籍断片 Mainz 345 の紹介

本断簡はドイツのトゥルファン探検隊(四次にわたるが、今年はちょうどその第一次探検隊出発の百周年に当たる)が将来したものであるが、第二次大戦後の一時期にマインツに保管されていたことがあったので Mainz 345 という整理番号が付けられている。現在はベルリンの国立図書館 Staatsbibliothek zu Berlin の所蔵となり、実際にはベルリン＝ブランデンブルク科学アカデミーのトゥルファン研究班 Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften, Akademievorhaben Turfanforschung によって管理されている。⁽¹²⁾縦横共に 10 cm 余り、表裏にウイグル文字が書かれた小断片である。かつてツィーメ氏によって原寸に近い大きさの写真が発表された (Zieme 1975, BTT V, pl. XLVIII) が、内容的には表の 8 行目と裏の 6 行目が引用されただけであり (BTT V, p. 62, n. 618 & p. 69, n. 726), ほとんど未研究のままであった。2000 年にヴィルケンス氏によって公刊されたベルリン所蔵マニ教ウイグル文献カタログには採録されている (Wilkins 2000a, pp. 85-86, No. 61) が、そこでも内容的には表の 1 行目と 9 行目、裏の 1 行目と 10 行目のテキストが移録されたにとどまる。ここではまず両者の記述を受け継ぎつつ全体のテキスト移録と、その直訳を行なう。表裏の判定もここでは兩人に従っておくが、ウイグル文を縦書きと見るヴィルケンス氏によれば表面の左端(すなわち冒頭)と下端(行末)が残っており、右端と上端は欠けているという。表裏の行は反対方向に進むので、裏面では行頭が残っていることになる。

recto (仮の表面)

01)

]L ötükün [

オチュケン

(12) ドイツのトゥルファン探検隊が将来したウイグル文書は、1999年の段階ではほとんどが国立図書館第一分館 (Staatsbibliothek zu Berlin, Haus 1, Unter den Linden 8) 内のベルリン＝ブランデンブルク科学アカデミー分館にあったが (cf. 森安 2000a, p. 128), その後の移転により、現在はベルリン＝ブランデンブルク科学アカデミーの本館 (Jägerstrasse 22-23) に配置されている。

- 02)]• ärkän: ymä
の時 また
- 03)]' ädgü ödkä iki türlügkä
よい時に、2つの種類に対し
- 04)] tngri bögü iligdän türlüg
神なる牟羽王より・・・
- 05)]KWN başan otuz uluy
をはじめ 30 人の大
- 06)] ulamış ärän tngri mr ●●
・・・男たちがテングリ=マール
- 07)]•gärü yalavač ktlilär :
へ使者としてやって来た(複数形).
- 08)]•Y možak ol ödün [
モジャク(慕闇)はその時
- 09)]TY : ymä •[
また
- 10)]•N ●●//W[

verso (仮の裏面)

- 01)] : tavyač [
中国
- 02) baliqänta taşyaru T[
その城市から外へ
- 03) yirgärü bardī : ymä tavyač [
土地へ行った。また中国
- 04) oγulintan qač qurlayu Y[
その息子のところから何度も

05) yalvara ötügi bizingärü [

祈願しつつ、彼の要請（言上）が我々の所へ

06) ötürü klti : ąmtü bizingä[

そうしてやって来た。今、我々の所に

07) bi'ling ilimz-ni ič'ynmalım [

汝よ、知れ。我々の国を我々は失うまい。

08)] ödün mning 'W[(or 'Y[)

時に、私の

09)]••WŠ SWW[

10)]D[]•: ąltü [

残った

次いでヴィルケンス=カタログと私の実見メモとを比較しつつ、全体の形状を再現する。ウイグル文字を縦書きと見て縦横 11.3 × 13.6 cm (Wilkens: 11.4 × 13.3 cm), 表裏ともに楷書体 (Wilkens: relativ altertümlicher Duktus 比較的に古い書体) のウイグル文字が 10 行⁽¹³⁾ずつ残存、行間値は 0.9 ~ 1.4 cm (Wilkens: 平均して 1.3 cm), 左端の余白は 2 cm (Wilkens が 1.3 cm とするのは誤り), 下端 (反対面では上端) の余白は 1 cm (Wilkens: 0.7 cm) である。紙色はやや赤みを帯びたページ beige rosé ~ beige (Wilkens: gelbbraun 黄褐色), 厚さはガラス板に挟まれているので確実ではないが中手~中手の厚い方らしい (Wilkens: mittelgrob). やや粗い漉き縞が僅かに見えるが、ほぼ均質、コーティングがされていて脆くなっている、全体としては中上質~中質の紙。行間値より左端の余白が広いので、冒頭行が残っていることは確実。左端には本来の頁の左辺がわずかに残るが、下端は本来の下辺ではなく、なお数ミリ程度の欠落があるらしい。本文は黒字のみで、界線もガイドラインも見えず、また朱黒二色を使った蝶ネクタイ型の典型的なマニ教的句読点もない。黒一色なので、決して豪華な冊子本ではなかった

(13) さらに片面にマニ文字の鏡文字（別文書からくつittedしたもの）が少しだけ見える。

と思われるが、それでもウイグル文字は立派な楷書体である。

本断簡がマニ教文献であることは、文中に現われるテングリ=マールやモジャク(漢文で慕闍; マニ教団第1位の高僧)などの術語から明らかである。また中央アジア出土のマニ教文献はいかなる言語のものであれ、多くは冊子本型式、一部が巻子本であり、貝葉型は例外的である。⁽¹⁴⁾ Mainz 345 は表裏に本文があつて巻子本ではありえないから、本断片が冊子本から離脱した1葉2頁分であることもほとんど疑いない。では本来の単葉の何割程度が残っているのであろうか。

そもそもマニ教徒が使用した冊子本の製本の仕方は、現代世界に流布している西洋式製本と同源である。つまり、1枚の紙を2つに折って4頁分の複葉を作り、それを何枚か重ねて折り目に糸を通して綴じるとリーフレットができる。そしてそういうリーフレットを糸で次々に綴じていって厚い冊子本にするのである。このような冊子本は、現代でもそうであるが、一般的には縦に細長い型式となる。ウイグル文字も本来は横書きであったソグド文字を受け継いだために、冊子本型式に製本される時には、現代の欧文の書物と同じく、ほぼ例外なく横書き扱いされている。ただし本文中にミニアチュールが挿入される場合、その方向は横書きの文章とは九十度ずれており、挿し絵の下辺が常に中央の折り目側、上辺が左右の縁側にくる。⁽¹⁵⁾

冊子本は、個人間の1回かぎりの使用を目的とするいわゆる「文書」ではなく、ほとんどが多数の人々を念頭に置き、保存と流布を目的として作られる「典

(14) Cf. W. Sundermann, BTT IV, BTT XI, BTT XV, BTT XVII, BTT XIX; Sundermann 1996; Weber 2000; Wilkens 2000a; Gulácsi 2000, Table 1 (pp. 274-277); Gulácsi 2001. 貝葉型のマニ教写本としてはウイグル語のいわゆる Pothi-book (cf. Wilkens 2000a, Nos. 4-14) が有名であるが、これは私の考えではマニ教時代後期に仏教の影響を強く被った例外的なものである, cf. 森安 1989, p. 19 & n. 77 (pp. 25-26).

(15) Cf. Gulácsi 2000; Gulácsi 2001, Introduction. “(1) the lines of the text are horizontal, and (2) the figural compositions are placed sidewise, at right angles in relation to the texts, i.e. the vertical axes of the figures parallel the lines of the writing.” (Gulácsi 2000, pp. 295-296). “We have seen that illuminated Manichaean codices are analogous in their layout to non-illuminated ones,” (Gulácsi 2000, p. 305).

籍」である。従ってたいていはプロの書写人によって楷書体で丁寧に書かれるものである。また、1 回限りの「文書」よりも保存を目的とする「典籍」に、より上質の、つまり高価な紙が使われるのも自然のなりゆきである。それ故、「文書」よりも「典籍」の方が紙型が小さくなる傾向にある。特に、マニ教文献中の冊子本は小型であることがよく知られている。マニ文字・ソグド文字の場合は、縦横数センチの超小型本さえ珍しくない。ウイグル文字の場合は、マニ文字・ソグド文字さらにルーン文字のものより大きい傾向にあるが、それでもなお横が8~9 cm から14~15 cm 前後、縦がその1.2~1.3 倍から1.7~1.8 倍というのが一般的であり、管見の及ぶ限りで最大の T II D 171 (MIK III 198) でも縦横 34.8 × 20.6 cm である。これは豪華本から離れた単葉であるが、上下左右は完全である。片面の本文が朱黒2色、反対面のコロフォンが緑・青・朱・橙・茶の五色で書かれた有名な文献である。⁽¹⁶⁾このような豪華本ではない一般的な冊子本の場合は、この大きさを越すことはまずなかったと考えてよさそう。

そうであれば、本断簡 Mainz 345 の元になった冊子本の本来の大きさは、横がせいぜい14~15 cm で、最大でも20 cm を越えず、縦もその1.5 倍前後であったと推測される。Mainz 345 は、上記の縦横の数値11.3 × 13.6 cm が逆転して、縦が13.6 cm、横が11.3 cm となるから、元来の単葉上部の半分から三分の一、各行の三分の二程度(少なくとも半分以上)は残存しているとみなして大過なからう。とすれば、表面と裏面との間にはいささかのギャップがあり、直接にストーリーを繋げることはできないが、表裏両面の10 行ずつについては、破損部はそれほど大きくはなく、それぞれのストーリーを復元することは不可能ではないはずである。

では、本テキストをどのように復元すれば、これまでほとんど注目されてこなかった本断簡を、ウイグル史上に、結論を先取りして言えば、ウイグルと安史の乱とを繋ぐ史料として、生き返らせることができるであろうか。そのための準備作業として、次節では漢文史料から知られているウイグルと安史の乱と

(16) 森安 1991, pls. XIX-XX にカラー写真あり。

の関係を、日時を追って振り返ってみよう。

第3節 ウイグルと安史の乱(年譜)

以下の年譜は主に両唐書のウイグル伝、郭子儀伝、僕固懷恩伝、安祿山伝、史思明伝、並びに資治通鑑に基づき、谷川 1954, 羽田 1957, 藤善 1966 (2000), 藤善 1972, Mackerras 1972, 佐口 1972, Kamalov 2001 などを参考にして作成したものである。各項目の冒頭に○を置くが、●はその年次の最初の項目である。

●天宝十四載 (755) 11 月 9 日, 幽州 (= 薊城, 范陽, 漁陽, 燕京) に本拠を置く范陽節度使(平盧節度使, 河東節度使も兼務)の安祿山が遂に蜂起。参謀は次男の安慶緒, 漢人官僚の嚴莊・高尚, 蕃將の阿史那承慶(突厥王族)・孫孝哲(契丹人)。全幅の信頼を置き父子軍(養いて自己の子と為すを仮子という, その仮子の軍)⁽¹⁷⁾と命名した親衛隊 8000 余騎を中心⁽¹⁸⁾に, 蕃漢 15 ~ 20 万(蕃軍には同羅・奚・契丹・室韋の曳落河を含む⁽¹⁹⁾)の勢力。

●天宝十五載 (756) 元旦, 安祿山は洛陽で大燕聖武皇帝として即位。

(17) Cf. 堀 1951, pp. 64-66 & n.27.

(18) 安祿山と麾下の蕃族出身軍人との個人的絆の強化については, cf. 堀 1951.

(19) 漢籍では曳落河 **īai-lāk-γā* (GSR 338a + 766q' + 1g) は異民族の言葉で健兒(傭兵の意味)や壮士と説明され, また仮子ともいわれる, cf. 堀 1951, p. 65 & n. 22; 羽田 1957, p. 280, n. 71; 前嶋 1965. この原語と原義については前嶋氏の研究がもっとも詳しく, これをソグド語チャーカル *chākar* の漢字音写語である柘羯の同義語とみなし, その意味は「奴隸・奴僕・私兵・奴隸兵士」であるといい, 原語としてアラビア語の *raqīq* の複数形 *arqā' / ariqā'* (*ariqqā'* のミスプリか?) を提案する。私は曳落河を *chākar* と同義語とみなす点には賛成であるが, その意味は奴隸兵士などとは少しく異なり, 「仮に親子の関係を結んで主君の側近に侍り, 共に死ぬことを誓った忠実で勇敢な兵士」のことであると考ええる。しかしながら, 同氏が曳落河の原語をアラビア語とする点は荒唐無稽としかいいようがない。安祿山勢力の兵士を指す重要な語にアラビア語の入り込む歴史的背景が全く想定できないからである。Cf. 稲葉 2001.

漢籍中の曳落河が安祿山軍の同羅・奚・契丹・室韋・六州胡と共に現われる文脈を考慮し, 且つこれが安祿山・史思明という安史勢力の中枢部やその軍団に含まれる六州胡の言語であるソグド語のチャーカルと同義語と考えたいならば, 当然これは同羅の使用したトルコ系の言語か, あるいは奚・契丹・室韋の使用したモンゴル系の言語

○同年6月、玄宗の命令により、哥舒翰軍は潼関より東に出撃。哥舒翰は敗北して敵の手中に。長安では楊国忠の主張により、蜀(四川)への蒙塵を決定。

○同年6月13日未明、玄宗、皇太子夫妻、楊貴妃とその一族、楊国忠一家、公主たちが、極秘裏に宮殿を脱出。

○その後、玄宗は蜀へ蒙塵し、皇太子は捲土重来を期して靈武へ向かう。靈武は西北辺境の要衝であり、かつ朔方節度使・郭子儀の本拠地。

○7月、皇太子は群臣の懇望を受けて、蜀にある玄宗を上皇にまつりあげ、肅宗として靈武で即位。至徳と改元。

○9月、肅宗はウイグルに援軍を求めるために使者を漠北のモンゴリアに派遣。使者となったのは、王族の一人(敦煌郡王承^シ案)とトルコ系武將の僕固懷恩とソグド系武將の石定番。10月にオルホン河畔のオールドバリクで会見。ウイグルの第2代可汗・磨延啜(葛勒可汗)は喜んで、可敦(qatun; 可汗の正妻)の妹を自分の娘とした上で、これを承^{めあわ}案に娶す。さらにウイグルの首領を答礼の使者として派遣してきたので、肅宗はこれを彭原に出迎え、ウイグル王女を毗伽公主に封じた。

○11~12月[通鑑によれば7~12月]、安史勢力側の阿史那從礼が突厥・同羅・僕骨軍5000騎を率い、河曲にあった九(姓?)府・六胡州の勢力数万も合わせて、行在=靈武を襲わんとした。⁽²⁰⁾ 郭子儀は、磨延啜自身が率いて南下してきたウイグル本軍を陰山と黄河の間にある呼延谷で迎え、これと合流。一方、

ㄨ のいずれかでなければなるまい。幸い『遼史』卷46・百官志・北面軍官に「拽刺軍詳穩司、走卒謂之拽刺；旗鼓拽刺詳穩司、掌旗鼓之事」(中華書局版, p. 739), 『遼史』卷116・国語解に「旗鼓拽刺 拽刺, 官名。軍制有拽刺司, 此則掌旗鼓者也」(同, p. 1542)とあり、契丹語に兵士ないし軍官の一種を表わすものとして拽刺 **īi-lāt* (GSR 272a) という語があるから、多分これと対応するに相違なからう。Cf. 小林高四郎・岡本敬二『通制條格の研究訳註』第一冊, 東京, 中国刑法志研究会, 1964, p. 72; 金文京ほか訳註『老乞大』(東洋文庫 699), 平凡社, 2002, pp. 200-201. [補注2]

(20) この時、阿史那從礼軍が長安よりオールドス方面へ移動(進軍?)し、唐の支配下にあった六胡州らのソグド系突厥と合流しようとしたのは、安祿山を裏切ったことなのか、それとも安祿山の策謀にもとづいて偽って唐に降ったものなのか、史料も議論もいささか錯綜している。『資治通鑑』卷218(中華書局版, pp. 6986, 6997, 7006-7007)ノ

これ以前に葛邏支率いるウイグル別働隊 2000 騎がまず范陽を攻撃したが、成功せずにそこから太原方面に移動。郭子儀軍はこれらのウイグル本軍並びに別働隊と協力して、阿史那從礼軍を斥け、河曲（黄河の大湾曲部内側の北半部、すなわちオルドスを中心に、その外側の陰山脈以南を合わせた一帯；現在の内蒙古自治区の一部と陝西省～寧夏回族自治区の北辺）⁽²¹⁾を平定した。

●至徳二年（757）元旦、安祿山は洛陽で実子の安慶緒、並びに腹心の部下によって暗殺さる。

○安祿山の盟友で、洛陽政権樹立の最大の功労者であった史思明は、いち早く分離独立の方針を決め、莫大な軍資金を蓄積してある范陽に帰還。

○同年 2 月、肅宗は鳳翔に進出。前年末からこれまでに、コータン・安西・

の本文と胡三省註、さらに Pulleyblank 1976, p. 44; Moses 1976, p. 78; Kamalov 2001, pp. 250-251 を参照。プーリブランク・モーリス氏は、阿史那從礼は安祿山を見捨てたとみている。カマロフ氏は、阿史那從礼は安祿山には背いたが、さりとて唐にも付かず、突厥復興を目指したとする大胆な説を展開する。しかしウイグル=唐連合軍に敗北した後、最終的には同じく旧突厥王族の阿史那承慶を頼って再び安史勢力側に戻った、というのは、やや論理が矛盾しているように思う。私は、阿史那從礼は一貫して安史勢力の側にいたと考える。つまり、通鑑考異に引く「汾陽王家伝」に、阿史那從礼は「偽りて叛と稱し、乃ち朔方に投じ」た、とあるのが真相に近いと考えている。

(21) この時、磨延啜自身が軍を率いて南下してきたと伝える史料は、漢籍の中でも『新唐書』巻 217 上、回鶻伝の以下の記事（中華書局版, p. 6115）のみである：「於是可汗自將，與朔方節度使郭子儀合討回羅諸蕃，破之河上。與子儀會呼延谷，可汗恃其疆，陳兵引子儀拜狼羆而後見。」同じ『新唐書』でも郭子儀伝では全くこれに触れず、他方『旧唐書』にも『資治通鑑』等にも一切記載がない。そこで羽田氏は、この時、磨延啜自身がウイグル軍を率いて南下したという事実はなく、『新唐書』回鶻伝の記事を誤りとして、これを採らない（羽田 1957, pp. 194-195, 197, 199）。然るに、回鶻伝を英訳したマッケラス氏はこれを真に受け（Mackerras 1972, p. 17）、最近のカマロフ氏もそれを正しいと主張し、次のようなシナリオを描いた：12 月に磨延啜自身がウイグル軍を率いて漠南のオルドスに進軍。それ以前に、葛邏支の率いる別のウイグル軍 2000 騎が范陽を攻撃したが、安史勢力側の尹子奇の反撃に遭い、唐側の太原方面に撤退し、そこからさらに磨延啜の本軍と合流。ウイグル軍は郭子儀の唐軍と共同して阿史那從礼軍を斥けた（Kamalov 2001, pp. 249-250）。確かに氏の言うように、このような中国側にとって極めて不名誉な記事をわざわざ捏造するはずもなからうから、私は目下のところカマロフ説に従いたい。ただし、マッケラス氏自身が後に発表した概説論文では、磨延啜自身が南下したようには書かれていない。Cf. Mackerras 1990, p. 317.

北庭・拔汗那・大食からの援軍が集結。同月、ウイグル首領の大將軍・多攬ら15人が入朝。

○同年9月、ウイグルの磨延啜可汗は太子の葉護を筆頭に、將軍の帝徳らに4000余騎(旧唐書・安祿山伝では3000騎)を率いさせて唐に派遣。肅宗は喜び、宴会を催し、元帥の広平王・俶(後の代宗)に命じて葉護と兄弟の契りを結ばせる。

○蕃漢15万にふくれあがった唐軍は、広平王・俶を総帥とし、鳳翔を出発。扶風でウイグル軍を出迎えた郭子儀は、3日間の大宴会で接待。以後、ウイグル軍には食料として毎日、羊200匹、牛20頭、米40石が支給さる。

○同年9月17日、長安攻撃開始。朔方左廂兵馬使・僕固懷恩とウイグル軍が連携して活躍。安慶緒側の守備軍は約6万の損失を蒙って潰走。唐軍、長安を回復す。

○同年10月、反乱軍は唐側の郭子儀軍やウイグル軍により潼関・陝郡を次々に落とされ、安慶緒は洛陽を脱出して河北の鄴^{キョウ}に走る。唐側は遂に洛陽を奪回。

○同年11月、長安で肅宗と葉護が会見。肅宗は葉護を労い、司空の位を与え、忠義王に封じ、錦繡綵や金銀器皿を下賜す。さらに毎年、絹2万匹を朔方軍にて支給する事を約す。

●乾元元年(758)5～7月、ウイグルの使者・多亥阿波一行が長安に来て、公主降嫁を要請。肅宗は幼少であった実の王女を寧国公主に封じて降嫁させ、同時に磨延啜を英武威遠毗伽可汗に冊立することを決定。寧国公主と冊立使の一行がウイグルの本営に到着。

○8月、磨延啜は王子の骨啜特勤と宰相・帝徳らに3000騎を率いさせて唐に派遣。肅宗は僕固懷恩にこの援軍との共同作戦の指揮を命ず。

●乾元二年(759)3月、史思明は安慶緒を殺し、4月、自ら大燕皇帝として即位。

○同年4月、ウイグルの磨延啜可汗が急逝。ウイグルは寧国公主を殉死させ

ようとしたが、公主は抵抗し、同年8月に唐に帰国。一方、長男・葉護太子は既に罪を得て殺されていたので、末子の移地健が牟羽可汗として即位（第3代）。磨延啜在世中に、移地健のために唐に婚姻を請うたため、肅宗は僕固懷恩に命じてその娘を娶せていた。それゆえ、彼女が可敦に昇格。

●上元元年（760）閏3月、史思明は洛陽に入城。再び東西両都に対立する政権。

○しかし、この後、史思明は長男の史朝義に替わって妾腹の子・史朝清を溺愛し始め、これを後継者にせんとしたため、逆に史朝義の部下が史思明を捕らえて幽閉。以後、史朝義が洛陽を保持。

○同年9月、ウイグルよりの使者として俱録莫賀達干^{グルカン}らの一行が入朝。

●上元二年（761）2月、史思明殺され、史朝義が即位。

●宝応元年（762）4月、約2年の蟄居生活の後、玄宗が死去。わずか十余日後に肅宗も崩御。代宗が即位。宝応と改元。

○同年8月、ウイグルは史朝義から援軍要請を受け、「唐朝では天子の死去が度重なり、国は乱れ、主君がいないので、侵略して府庫を手に入れてはどうか」（両唐書ウイグル伝）と誘われたので、牟羽可汗自らが「国を傾けて」十万とも称される大軍を率いて南進。

○同年秋、代宗は、史朝義軍を打倒するため、中使・劉清潭を派遣し、ウイグル軍の出動を要請。劉清潭は既に陰山を越えていたウイグル軍と遭遇。劉清潭が可汗に、かつて代宗がウイグルの葉護と協力して安慶緒から両京を奪還した故事、さらに唐からウイグルに毎年絹数万匹を贈っていることを訴えても、ウイグル側はこれを無視して太原方面に向かう。そこで劉清潭は長安の代宗に密使を送ってウイグル軍の現状を報告。長安中が略奪の危険を恐れて震撼。たまたま可敦が両親に会いたいと要請してきたので、僕固懷恩が太原方面に赴き、娘婿の牟羽可汗に道理を説く。その結果、ウイグルは再び唐側に就くこととなる。

○代宗は雍王适^{カッ}（後の徳宗）を兵馬元帥とし、僕固懷恩らに命じて、陝州（太

原倉の食料あり)でウイグル軍に合流させる。牟羽可汗は雍王を引見するに当たって、雍王が拜舞(踏舞)の礼をしないのを難詰。やりとりがあるが、結局、雍王の側近を不敬罪で棒打ち(翌日死亡)。この後、ウイグルの右シャドの軍と僕固懷恩軍とが先鋒となって戦い、遂に洛陽を奪還(10月)。史朝義は范陽に向かって敗走。雍王は靈宝に帰り、可汗は河陽(河南省孟県、黄河の北岸)に数ヶ月間駐屯。僕固懷恩の息子・僕固瑒^{チョウ}の軍はウイグル軍と共に史朝義を2000余里も追跡して追いつめる。

●宝応二年(763)正月、史朝義は范陽で自殺。史朝義の首が長安に届き、安史の乱、平らぐ。

○同年2月、牟羽可汗は代宗に別れを告げて帰国。内殿にて綵200段を賜与さる。

第4節 ウイグル文典籍断片 Mainz 345 の推定復元

これまでに本断簡の内容ないし性格について言及したことがあるのは、最近のクラーク氏とヴィルケンス氏のみである。クラーク氏はウイグル文マニ教文献を網羅的に列挙する論文の中で、これを“Installation Hymn(?)”に分類⁽²²⁾し、他方、ヴィルケンス氏作成の最新カタログではこれを「歴史文献」の項に入れ、“Kirchengeschichtlicher Bericht über die Verbreitung des Manichäismus im uigurischen Steppenimperium.”すなわち「ウイグル草原帝国(=東ウイグル可汗国)におけるマニ教の流布に関する教会史的記録」と規定⁽²³⁾している。第2節において仮に提示したテキストと試訳を見れば分かるように、ここはヴィルケンス氏の判断の方がよからう。次節で述べるように、ウイグルには確かに歴史文献を作る伝統があった。

そこで私は、これが歴史文献に違いないという前提のもとに、Mainz 345のテキストのかなり大胆な復元を試みる。その際、表裏の判定はこれまでのツイー

(22) Clark 1997, p. 133, No. 124.

(23) Wilkens 2000a, p. 86.

メ・ヴィルケンス両氏とは逆にしてある。その理由は、以後の行論により順次明らかになるはずであるが、復元内容の時間的推移に由来する。また、この判定は、冊子本の場合、頁の内側の方（糸綴じ穴に近い方）が残りやすいという一般的な傾向とも合致する。

復元テキストと和訳 [Plates I-II 参照]

凡例 Explanation of symbols and conventions employed in this edition:

bold Suggested restoration of wholly damaged letters.

italic Letters partly preserved and restored with certainty.

[] Damaged part whose number of letters cannot be conjectured.

]xyz Damaged part of undetermined extent, at the beginning of a line.

xyz[Damaged part of undetermined extent, at the end of a line.

.... Approximate number of visible but illegible letters.

recto (本来の表面)

r1)] : tavyač-nīng tngri oyulī? kičiu?

... 中国 [の 天子? は 京兆?]

r2) baliqīnta tašyaru tāzip? kidinki? iraq?

城市から外へ [逃げ出して?, 西方の? 遠い?]

r3) yirgārū bardī : ymā tavyač-nīng tngri

土地へ行った (蒙塵). そして中国 [の天]

r4) oyulīntan qač qurlayu Y[

子のところから何度も [救援の軍? を]

r5) yalvara ötūgi bizingārū [

要請しつつ, 彼の請願書が我々の所へ...

r6) ötünü klti : amtī bizingārū [

請願して来た。「今、我々の所に〔敵が攻めて来ている？しかし〕

r7) *biling ilimz-ni ičyınmalım* [

汝よ、知れ。我々の国を我々は失うまい。】(天子の言葉) . . .

r8)] *ödün mning 'W* [(or 'Y [)

. 時に 我が

r9)] *••WŠ sü* [

. 軍

r10)] *D* [] *• : qłtř* [

. 残った

verso (本来の裏面)

v1)] *il ötükän qut* [

. イル=オチュケン [のカリスマ] . . .

v2)] *• ärkän : ymä*

. の間 (一方), また

v3) *qutluy qoluqa ädgü ödkä iki türlügkä*

[吉 辰] 吉 日 に, (国家と宗教の) 両方に対し

v4) *tükällig tngri bögü iligdän törlüg*

[完全な支配権を持つ?] 神聖なる牟羽王の所より, 高座のある?

v5)] *sangun bašan otuz uluy*

. [将] 軍を始めとして 30 人の大

v6) *sü bašılarqa? ulamış ärän tngri mr nyw*

[軍司令官? に] 附属する兵士たちが神聖なるマール=ネーウ=

v7) *rw'n možak-gärü yalavač kltilär :*

[ルワーン慕] 闇のところに使者としてやって来た。

v8)] *tngri možak ol ödün* [

. 神聖なる慕闇はその時

v9) JTY : ymä •[
 ~した. また

v10)]•N ••//W[

語註

r 1 a: tavyač[-ning tngri oγuli?] 中国の天子? : もしこれでは破損部に補う文として長すぎるのであれば, tavyač [qani] 「唐のカン=中国皇帝」と復元することも可能である. r 2 a に引用するシネウス碑文を参照.

r 1 b: kičiu? 京兆? : 古代ウイグル語訳『慈恩伝 (玄奘伝)』には中国の首都を指す言葉として kičiu が現われる. この kičiu が長安の別名「京兆」の音写であることは疑いない, cf. Tyrymeba 1980, pp. 30, 63; 吉田 1994, p. 291, n. 11. 吉田豊氏によれば, 『慈恩伝』の漢文原文には「西京」としか書かれていないのをウイグル語で kidinki kičiu baliq すなわち「西にある kičiu 都城」と翻訳しているのは, kičiu が既にウイグル社会に借用語として定着していたからに違いないという.

r 2 a: [täzip?] 逃げ出して? : [ašlap?] も可能である. täz- “to run away, fly” (ED, p. 572); tašla- “to go out” (ED, p. 564). 磨延喙の記念碑であるシネウス碑文についてはラムシュテットのテキストと独訳 (Ramstedt 1913) が有名であったが, 近年, 我々が現地で再調査した結果, かなりの修正を加えることができた. その羊年 (755 年) の条に, 私は新たに安史の乱関係の記事を読みとった. 前注 21 で言及したカマロフ説とも密接に絡むので, 森安 1999, pp. 181, 185, 189 より関連箇所 (西面 2 ~ 4 行目) を引用する.

テキスト

W2: (行末) qony yılqa

W3: // -tīm yaylađīm? // -miš tavyač qanī q /
 / # // täzäp barmiš // oγlın qotđīm //
 -ki bodun // -g toqıđım anta olurıp ävinä ettim qut yartay(?)
 tuyın

W4: ävim keñ // bodunıy qut // #
 // ävimä ekinti ay altı yañıqa tüşdim taqıyū yılqa (後略)

和訳

W2 (行末) 羊歳 (755年) に、

W3 ////////// 私は***し、夏営した (?). ////////////////////////////
////////// 唐のカン (皇帝) が ////////// (首都の長安から) 亡命していったと
いう。////////// 彼の息子を私は置いた (または、放置した?). //////////
////////// 民衆 //////////
////////// を私は打ち負かした。そこに留まって、私は彼の帳幕のために
作った、幸運????? 麤を。

W4 私の天幕は広く、////////// 民衆を、//////////
////////// 私の天幕 (本営) に、2月6日に下馬した。鶏歳 (757年) に、
(後略)

もしかしたら、西面3行目の qanī と täzäp の間の q- で始まる語は qurīyaru「西方へ」かもしれない。

r 2 b: kidinki? iraq? 西方の? 遠い? : 後続の単語は yirgärü であって、3人称の人称語尾を持つ yiringärü ではないのだから、その直前に「蜀」のような固有名詞は来ないだろう。kidinki の代わりに qurīyaru / qurīya でもありえる。

r 2-3: 蒙塵: カラバルガスン碑文 (後注 48 とその本文を参照) の漢文面第 6 行目に見える「蒙塵」に対応 (次節に原文引用)。歴史的事実としては磨延喏時代の出来事であるにもかかわらず、牟羽時代に記載される。しかもそれが本断簡とカラバルガスン碑文の両方に共通している点については、次節で考察する。

r 3-4: tavy[ač-niŋg tngri] oyulintan 中国の天子のところから: もし上の 1 行目を tavyač [qanī] と復元するのであれば、ここは tavy[ač qanī-niŋg] oyulintan「中国皇帝の息子のところから」と復元した方がよからう。その際は当然ながら、本来の意味で蒙塵した玄宗ではなく、ここではその息子の肅宗を指すことになる。

r 4: 救援の軍?: Y- で始まる適当な語として yardam / yardım “help” があるが、これはペルシア語に由来するものらしく、ラドロフのトルコ方言辞典 VWTD やデルファールの辞典 TMEN, No. 1780 を見ても、西方方言にしか見当たらない。であるから、ここに当てはめるには、さらなる論拠が必要となろう。

r 5: ötügi 請願書: 私の考えでは、これこそまさしくカラバルガスン碑文のソグド語面第 9 行目に見える「(中国の天子からの)言葉=請願書」に対応する。こ

れに関連する箇所は、次節で吉田豊氏のテキストと和訳を引用する。ソグド語原文は *ptškw'nh* であり、これは目下から目上に向けた言葉や手紙である。本節簡に使われるウイグル語の *ötüg* “request, memorial to a superior” (ED, p. 51) もまた、下から上へ向けられた言葉や請願、さらにはその文書であり、神への祈願文や皇帝への上表文さえ意味することができる、cf. MOTH, glossaire; Röhrborn 1996, p. 270, n. 2068. ここでは唐の皇帝がウイグルの可汗宛に使者に持たせた救援依頼の手紙に対し、この言葉を使っていることに注意したい。完全に可汗の方が上という扱いである。また、最初の請願書は肅宗から磨延啜に出されたはずなのに、カラバルガスン碑文ソグド面では牟羽時代に記載される。この点も、次節で考察する。

r 6: *ötünü* : BTT V, p. 62, n. 618 では *ötürü* “dann” としているが、読み変える。*ötüg ötün-* でひとまとまりの表現になっている。

r 7: *ičyñmalim* 失うまい : Röhrborn 1996, p. 230, n. 1250 によれば、『慈恩伝』では *ičyñ-* が漢語の「失」と対応している。*ičyñ-* “to allow to disappear; to let slip” (ED, p. 23) なので、「破滅させまい」と訳すことも可能であろう。

r 9: *sü* 軍 : *sü* は SWY ではなく SWW と書かれている。この不規則な正書法については、cf. MOTH, p. 80, n. 14.9. しかしその前の単語は *uluγ* 「大きい」とは読めない。

v 1: *il ötükän* [qut/// イル=オチュケンのカリスマ : マニ文字で書かれたトゥルファン出土ウイグル語文献 M 919 (TM 417) in *Manichaica* III, No. 15 の本文中に 2 度 *il ötükän qutī* という表現が見える。これはウイグル王の別称として有名なイディクト号が現われる最初期の文献で、ルコックの紹介以後、アラト論文 (Arat 1964) をはじめ幾度も取り上げられてきたものであるが、表裏の関係さえも含めてまだまだ再検討の余地がある。私は原文書に当たってテキストの一部を改善できたが、ここでは関連部分のみを試訳しておく。

テキストと和訳

recto

前略

r11) qra bođun buqun busušluy qad̄yuluy

ただの民衆(たる我々)は、憂いと悲しみに

r12) boltumuz ärtii ∞ qalt̄ü yna kün tngri

くれてしまっていた。(ところが) あたかも再び日神の

r13) orn̄nta yruq ayy tngrii yašiyu blgürä

地位に、まばゆい月神が輝きつつ現われ

r14) yrliqarča ‘iligmz ‘iđuq-qut ol’oq (or ul’uy)⁽²⁴⁾

なさるように、我らの王たるイディクトがまさにその(or 大いなる)

r15) orunta blgürä yrliqad̄iir ∞ altun örgin

地位に現われなさった。黄金の玉座の

r16) üzä oluru yrly bolt̄ü ∞ ‘il ötükän

上にお就きになられた(?)。イル=オチュケン

r17) qut̄ü ‘ilki bögü ‘iliglär qanglar̄ih

のカリスマが、以前の賢き王父たちや

r18) ‘iliglär qut̄ü bu ‘iđuq örgin qut̄ih

王たちのカリスマが、この聖なる玉座のカリスマが、

r19) tngrii ‘iligmz ‘iđuq-qut üzä ornanmaqi

天神のような我らの王たるイディクトの上に着座すること

r20) bolzun ∞

あれかし。

後略

(24) かつてこの語は aulauč / avluč / awlawč などと読まれており、これを含む箇所を Le Coq, *Manichaica* III, p. 35 は「我らの王であるイディクトが Awlawč の地位に」、Gabain 1949, p. 61; Arat 1964, p. 152 は「イディクトであり、Awwlawč という名前を持つ我らの王が」と解釈した。それをレールボーン氏 (UW 4, p. 280) は ol’oq 「まさにその」、ツィーメ氏は ul’uy 「大きい」と読み替えた, cf. Rybatzki 2000, p. 258. この読み替えのような古い正書法は、例えば U 168 = *Manichaica* I, p. 8, l. 11, p. 11, l. 3, p. 12, l. 17 に見られる。

verso

前略

v10) qalnū qarasiī ∞ kök tngriḏä qodū yir

大衆, (上は) 蒼天から下は大地の

v11) tngrii xanīḡa tgii ∞ qutlar waxšiklar

神たるハーンまで, 守護⁽²⁵⁾霊たちも

v12) barča köngültä bärü ögirá svintü

皆, 心から 喜んで, 我々は

v13) bu qutluy künüg küsüšlög täginür

この幸運な日を念願どおり享受して(?)

v14) ärtimz ∞ 'il ötükan qutū küč birü

しまった。イル=オチュケンのカリスマが力をお与えに

v15) yrlıqaduq üçün biz qmyn barča köngültäki

なられたために, 我々全てが皆, 心の中にある(待望の?)

v16) qutuy bulu täğintükümüz üçün ∞ köngültä

幸運(?)を見つけ奉ったがゆえに, 心底より

後略

さらに 10 世紀の敦煌文書である Pelliot chinois 2988v = MOTH, No. 15, l. 1 にも
イル=オチュケンが現われ, ハミルトン氏は il ötükan [qut]l[uy] という形を推定
する。⁽²⁶⁾ 同氏は先の il ötükan qutū を "l'esprit gardien ou pouvoir bénéfique (qut) de
l'Ötükan impérial (el)" と解釈する。私が qut を「カリスマ」と翻訳したのは, A.

(25) この qut waxšik を人格を持った「守護霊」と訳してよいことについては, cf. 森安
1991, p. 23.

(26) 実際にはハミルトン氏の紹介する文書には 'WTK'N としか書かれていないが, 同
氏はこれを ötükan ('WYTWK'N) に比定する。エルダル氏はそれに疑義を呈す (M. Erdal,
Bulletin of the School of Oriental and African Studies 51-2, 1988, p. 256). しかしこれをオ
チュケン以外に解釈する必要はまったくない。他にも 'WYTK'N (MOTH, No. 20, l. 9)
とか 'WYTYK'N (Tuguševa 1996, pp. 356, 359) と書かれた例がある。

Bombaci 氏らの先行研究を批判・整理し直した護雅夫説に拠っている。⁽²⁷⁾

8 世紀のタリят碑文東面 E3, 並びにシネウス碑文北面 N2 に見えるオチュケン=イリ *ötükän ili* 「オチュケンの国>オチュケン地方」⁽²⁸⁾とは語順が逆の表現であり、意味する内容にも決定的相違がある。本断簡のここでも私は *il ötükan* [qutı] ないし *il ötükan* [qutluy] のいずれかであったと推定して大過ないと確信する。要するに、モンゴリアの遊牧騎馬民族の伝統的聖地であるオチュケン山を押さえた者が、そこに宿る「カリスマ」より権威・権力を保証されることによって、正統な可汗たり得るという思想が背景にあったに違いない。残念ながら護氏自身はウイグルに関わる M 919 (TM 417) 文書に言及することがなかったが、護 1967, pp. 24-29 と Mori 1981, Section III (=護 1983, 第Ⅲ節) とを合わせれば、突厥についてそのような結論が得られるのである。一方、クリムカイト氏は Klimkeit 1979, pp. 256-257; Klimkeit 1982b, pp. 25-27 で、M 919 をも使いながら、ウイグルにおいてシャマニズム的な *qut* がマニ教的な *qut* と融合していく過程を描き出している。同氏の論には時に危ういところや誤解も残るが、⁽²⁹⁾大筋では賛成できる。また最近ではヴィルケンス氏が、“der bekannte Schutzgeist der Ötükan-Alm” 「有名なオチュケン山の守護神」が、マニ教的文脈ではマニ教の中心的神格である “Licht-Nous” 「光の智慧」(*manohmēd rōšn*) と代替されていた⁽³⁰⁾可能性さえあると述べている、Wilkens 2000b, p. 229。

v 3: iki türlüg : iki türlüg は字義通りには「二つの種類；両種」の意であるが、

(27) Mori 1981, Section III; 護 1983, 第Ⅲ節。これに反し、クリムカイト氏がかつてはドイツ語で “charismatische Kraft” (Klimkeit 1979, p. 256), 英語で “fortune or charisma” (Klimkeit 1982b, pp. 23, 25) と言っていたのに、新しい英訳では “spirit” (Klimkeit 1993, pp. 356-357) としているのは、真実より遠ざかっているように思える。

(28) Cf. 片山 1999, pp. 169, 171, 172; 森安 1999, pp. 178, 182, 186.

(29) 例えば Klimkeit 1982b, p. 25 で M 919 (TM 417) の年代を 821-824 年に比定する (Klimkeit 1993, p. 356 ではややニュアンスが弱まっている) が、これは Gabain 1949, pp. 61-62 に引きずられたもので、全く根拠がない。ガバイン説の誤りは Rybatzki 2000, p. 257 でも指摘されている。

(30) ウイグル語の *nom qutı* に対応する, cf. 森安 1991, pp. 201-202.

マニ教文献では「(国家と宗教の) 両方」という特別の意味を持つ, cf. MOTH, No. 5, l. 55, note 5.53-56 in pp. 50-51; Sundermann 1992, p. 79.

v 4 a: bögü 牟羽: bögü は “‘sage, wizard’; the word seems to connote both wisdom and mysterious spiritual power” (ED, p. 324) という意味であるが, 固有名詞の要素としても使われた。その実例として, 例えば 8 世紀前半の第二突厥可汗国時代の Bögü qayan や, 西ウイグル王国時代に属する 1008 年の棒杭文書に見える Kün Ay Tängritäg Kūsānčig Körtlä Yaruq Tängri Bögü Tängrikän (= “Godlike Bögü Tängrikän ‘Mystical Holy Spirit’, who is desirable, beautiful and shining like the Sun and the Moon God”, (cf. Moriyasu 2001, pp. 161, 162; 森安 1991, p. 184), 同じく西ウイグル時代の 2 人の王 (cf. 森安 1991, pp. 183, 185) が知られる。しかしながら, 本文書に現われる Bögü Ilig は, 牟羽可汗マニ教改宗物語として有名なウイグル文書 (U 72 & U 73 = TM276 a&b in TTT II, “Manichaica”) の主人公 Tängri Ilig Bögü Xan “The Divine King Bögü Khan (クラーク訳)” (ll. 33, 52, 62) ないし Bögü Xan Tängrikän (l. 80) と同様, 史上に名高いあの東ウイグル可汗国第 3 代の牟羽可汗以外ではあり得ない。

v 4 b: törlüg 高座のある?: この törlüg と前行の türlüg は綴りが同じであるが, ここは先行する関連語句のない, いわば裸の形で現われているので, 前行のような「種類」の意にはなりにくい。仮に tör “the place of honour” の派生語とみなしておく, cf. ED, pp. 528-529; TMEN, No. 955.

v 5 a: bašan: bašin 「を始めとして; 筆頭に」と同じと見る, cf. 庄垣内 1976, p. 033.

v 5 b: uluγ: 語末の -γ の尻尾が長いのは本来なら間違いである (cf. 森安 1989, pp. 3-5; 森安 1991, p. 46) が, 行末の埋め草なので長くなっている。

v 6-7: tngri mr nyw [rw’n moža]k 神聖なるマール=ネーウ=ルワーン慕闐: マニ教高僧の人名として「マール=ネーウ」では完結せず, 必ずやもう 1 つの単語が接続し, その後に高僧の称号 (モジャク, アフタダン=イスバサク, マヒスタク, 等) が来なければならない。たとえばマール=ネーウ=マーニー=マヒスタク

tngrī mr nyw mani mxistak という実例があるが (U 168 = T II D 173 a², in *Manichaica* I, p. 12; cf. 森安 1979, p. 216; Clark 1997, p. 105), これは 795 年頃にモンゴリアの「教義の長」であったマヒスタクである。私は次項・次々項の語註と併せて考えて、本断簡のこの箇所には、必ずやモジャク=慕闍が入るはずであると確信する。またマニ教の教区〔大司教区〕には教団最高位の慕闍は一人しか存在しないものである。ならば牟羽時代にウイグルを含む東方教区全体に慕闍は唯一人しか存在し得ないから、これを特定する可能性が生じる。幸いなことに吉田氏と私は最近、カラバルガスン碑文の中に、牟羽がマニ教に改宗した時期にコンタクトを持った慕闍を特定することができた。それが、ソグド面第 12 行目に見える βry (mry) nyw(rw)'n m(w)z-'k(')[「神であるマール=ネーウ=ルワーン慕闍」(森安/吉田/片山 1999, pp. 216, 217; 吉田 1988 では未解読だった), 並びにルーン面の tāngri mar N/////「神聖なマール=N/////」(森安/吉田/片山 1999, pp. 222-223)である。1999 年の共同論文の段階ではまだいささか躊躇していたが、現在ではこれらは同一人物に違いないと確信するに至っている。従ってここの tngri mr nyw の後ろにも自信をもって [rw'n moža]k を補いたい。

v 7: [moža]k-gärü: 前舌系の方向格語尾 -gärü の直前には、地名や人名が来るが、後舌系の地名(例えば tavyač)ではありえない。možak は後舌母音をもって、外来語であり、ウイグル語では外来語には常に前舌系の語尾が付くという原則があり、-gärü の前の語の末尾の長い尻尾は -K のそれと思われるから、この復元で問題なからう。マニ教寺院経営令規文書には možak-kä という前舌系語尾 -kä の付く実例がある, cf. 森安 1991, p. 112.

v 8: tngri možak 神聖なる慕闍: これは先の「神聖なるマール=ネーウ=ルワーン慕闍」と同じ人物を繰り返し指すと思われる。これはさらに次節で言及する牟羽可汗マニ教改宗始末記の 26 行目 (TTT II, pp. 414-415, l. 26; Clark 2000, pp. 102-103) に見える tngri možak と同一人物であるに相違ない。

以上の復元テキストをまとめれば、表面がウイグルの安史の乱への介入、裏

面がウイグルへのマニ教伝播を公認した牟羽可汗とマニ教団との関わりを記述したものとなる。より具体的且つ大胆に推定すれば、次のようになろう。表面の1～3行目が756年の玄宗皇帝(並びに後の肅宗皇帝)の長安からの蒙塵、3～7行目が中国皇帝からウイグルへの書信による救援依頼、8～10行目がウイグル軍の中国への出動、そしてその後かなりの欠落がある。続く裏面1～2行目で、牟羽可汗がトルコ民族の聖なる山であるオチュケン山のカリスマ的存在(威霊;守護神そのもの?)に護られた正統な可汗として統治していることを述べた上で、3行目以降では、さらにマニ教を受容して(或いは受容しようとして)マニ教団最高位の僧たる慕闐と交渉を持ったことを述べている。

ではこの慕闐はどこにいた者であろうか。ユーラシア全域に亘るマニ教世界においては、モンゴリアや中国を含むパミール以東には教区は1つしかなかったというのが通説である。マニ教徒のいわゆる hwr's'n p'ygwš「東方教区」である⁽³¹⁾。従って教区のトップである慕闐もパミール以東には1人しかいなかったはずである。西方からパミール以東の地に初めてやってきた慕闐は、開元7年(719年)にトカリスタン(吐火羅)のチャガニヤン(支汗那)王から唐皇帝のもとに派遣されてきたその人であろう。当然、彼は長安に居を構えたにちがいない。開元19年(731年)には長安で、慕闐に次ぐランクの高僧である拂多誕が^{アフタダン}勅命を受けてマニ教を紹介するために「摩尼光佛教法儀略一卷」を漢文で翻訳(正しくは原典からの直訳ではなく、漢文による翻案)している。中国のマニ教は、翌732年には禁止されるが、ソグド人を始めとする西域人にはそのまま認められた。⁽³²⁾少なくとも731年までは先のトカリスタンからやって来た慕闐(ないしその

(31) Cf. Henning 1936b, p. 10; Henning 1938, p. 551; Sundermann 1984, p. 301; Sundermann 1992, p. 68; Gulácsi 2001, p. 222.

(32) 以上の経過と史料については、多くの言及があるが、とりあえずは、cf. Chavannes / Pelliot 1913, pp. 152-155, (Texte III-VI), p. 196 (fn. 1); Henning 1936a, p. 13; 矢吹 1988, pp. 46-47, 80-81; 森安 1991, p. 64, fn. 81. なお、762/763年に洛陽で牟羽が会ったマニ僧は、719年にトカラからやって来た慕闐でも、その後継者たる慕闐でもなく、後継慕闐の弟子ないし部下とみなすべきであろう。

後継者) が長安を動く必要はなかったが、732 年以後は状況は流動的になったといえよう。牟羽可汗が部下に命じてコンタクトを取らせたマール=ネーウ=ルワーン慕闐は、719 年にトカリスタンから長安にやって来た慕闐の後継者であろうから、やはり長安にいた可能性がなくはない。しかしながら、その一方で、トゥルフアン出土文献の U 1 (published in Le Coq 1912; = T II K 173 = Wilkens 2000a, No. 49) に「ウイグルのブグク汗が高昌にやって来て、羊の年に」慕闐に会見したとあるブグク汗は懐信可汗であり、その羊の年が 803 年(癸未年)である蓋然性が極めて高いことから、安史の乱頃までには既に慕闐はソグド人の多い天山地方の高昌(あるいは焉耆)に移ってしまっていたと考える方が真実に近いであろう。⁽³³⁾ 760 年代ともなれば、東部天山地方にはゆるやかながらもウイグル可汗国の勢力が及んでいたであろうし、たとえ及んでいなくても、平和的に慕闐に会う使者を派遣することには何の障害もなかったはずである。豪華なマニ教賛美歌集 *Maḥrnāmag* が大きな喜びをもって作成し始められたのが 761/762

(33) Cf. 安部 1955, pp. 207-210; 森安 1979, p. 215; Moriyasu 1981, p. 198; Hamilton 1986 (MOTH), p. XV; Thierry 1998, p. 270. 因みに Clark 1997, pp. 102-103 では、このブグク汗を牟羽可汗とみなし、問題の羊の年を、牟羽が王子として天山地方に出征していたはずの 755 年(乙未年)である可能性を主張したがっているが、それは無理である。Clark 2000, pp. 110-114 では 755 年説を提案した根拠をより詳しく挙げながらも、結局はしぶしぶながら 803 年説に従っているようである。一方、Tremblay 2001, p. 32, n. 48 と p. 238 の記述には矛盾があり、前者では安部以来の 803 年説を受け入れるにもかかわらず、後者ではなんと牟羽可汗時代最末年の 779 年(己未年)とみなしている。さらに、Rybatzki 2000, pp. 260-261 ではこのブグク汗を西ウイグル王国の建設者と考え、それを 860-870 年代に漢文史料中に見える僕固俊(cf. 森安 1977, pp. 119-123)と結び付け、問題の羊の年を 887 年か 947 年(いずれも丁未年)とする。ここでの議論は差し控えるが、この見方には従えない。

(34) Cf. Henning 1936a, p. 15, fn. 2; Henning 1938, pp. 551-552; Sundermann 1984, p. 301; Sundermann 1992, pp. 68, 74-75. この後、西ウイグル時代までずっと東方教区の慕闐の本拠は高昌にあったと、ほとんど全ての先行研究で考えられている。西ウイグル時代の高昌に慕闐がいたことは、多くの出土文書より明らかなのであるから、この見方は当然である。私もその見方に基本的に賛成であるが、安史の乱前後から 8 世紀末までの短い間のみ、慕闐は一旦焉耆におり、その後高昌に移った可能性も留保しておきたい。

年、焉耆のマニ教寺院においてであったという事実も想起されるべきである。⁽³⁵⁾
シャヴァンヌ／ペリオ両氏は、760年代のトゥルファン地方はまだウイグルの
直接統治下になく、ウイグル国に1人しかいないはずの慕闐はウイグル本国に
住んでいたと考えたい口振りであるが、⁽³⁶⁾牟羽可汗のマニ教改宗から間もない早
い時期に、東方教区トップの慕闐がモンゴリアに移動して本拠を構えたという
推定は決して容認できるものではない。さらに Tremblay 2001, p. 99 では慕闐が
当初は高昌に、次いで 719 年から長安に、そして 763 年からカラバルガスン
(モンゴリアのオルホン河畔にあったウイグルの首都の遺跡名)に移ったと言うが、こ
れまた到底受け入れられる説ではない。

第5節 ウイグル文典籍断片 Mainz 345 の歴史文献学的意義

古代トルコ民族の間に歴史意識が芽生えたのは、ウイグルに先行する突厥か

(35) Cf. Müller 1913, pp. 15, 36; Gabain 1949, p. 60; Clark 2000, pp. 99-100; Rybatzki 2000, p. 255.

(36) Chavannes / Pelliot 1913, pp. 196-198 (fn. 1). なお、両氏は9世紀の第1四半世紀にウイグル本国にいた「大摩尼」(李肇『唐国史補』巻下)が慕闐である可能性を残しているが⁸ (Chavannes/Pelliot 1913, pp. 267-268, fn. 2; cf. 森安 1990, p. 87; Moriyasu 2000b, pp. 436-437), 私はこの考えには従えない。なぜなら私は吉田豊氏と共に、牟羽時代も8世紀末の懐信可汗以後も、モンゴリアには一度も慕闐(第1位のモジャク)の本拠は置かれなかったという立場をとっているからである。今や、795年時点におけるモンゴリアのマニ教団のトップは第3位のマヒスタクとする見方が優勢であり(語註v 6-7に言及した U 168 = T II D 173 a² のコロフォンより; cf. Clark 1997, p. 105), カラバルガスン碑文の後半部にアフタダン座が見えるから、我々は795年以降、保義可汗(在位 808-821年)の末年までの間にようやくモンゴリアに第2位のアフタダンが赴任した、と推測している、cf. 森安／吉田／片山 1999, p. 223。一方、保義可汗時代に完成し、20世紀になってトゥルファンより出土した Maḥmāmāg には1組のモジャク・イスバサク(=アフタダン)・マヒスタクが現われるが、彼らは高昌にいたのであって、モンゴリアにいたものではなからう。東方教区の慕闐は1人なのだから、同時にモンゴリアに慕闐がいたはずはない。もちろん、8世紀末から9世紀前半にかけてのウイグルはその勢力を明らかに東部天山地方にまで及ぼしていたというのが私の見方(森安 1979; Moriyasu 1981)であるから、その時点でウイグル本国に東部天山地方を包含させるならば、確かにウイグル本国からやって来た「大摩尼」の中に慕闐が含まれた可能性は否定できないが、モンゴリアにいた慕闐という意味にはならない。

らである。既に第一突厥可汗国の時代に、ソグド人が文字をもたらし、公用語となったソグド語でブグト碑文や昭蘇縣石人銘文（ブグト碑文の形状は中国的、昭蘇石人は突厥的）が記され⁽³⁷⁾、第二突厥可汗国の時代には有名なオルホン諸碑文が作成されている。後者の代表はビルゲ可汗碑文・キョル＝テギン碑文・トニユク碑文・オング碑文・キュリ＝チオル碑文であり、いずれも独自のルーン文字トルコ語で書かれている。護雅夫氏が言うように、オルホン諸碑文に一人称・二人称の言葉が混じるのは、トルコ民族の文学の源流がシャマンの口を借りて語られた祖霊の言葉にまで遡るからであろうが、そこには既に膨大な歴史書の蓄積を誇っていた中国側の影響もなかったはずはなからう。ウイグル時代になっても突厥の伝統を踏まえて第2代可汗の磨延啜の功績を記念するシネウス・タリアト・テスの3碑文が作られている⁽⁴⁰⁾。以上は全てマニ教伝播以前の文献であり、本文中にマニ教の影響は一切認められない。

いうまでもなく、ウイグルへのマニ教公伝は第3代の牟羽可汗（本名：移地健）の時（通説の762/763年より少し前であると思われることについては後述）であり、マニ教徒は教会史の伝統を持っていたのであるから、牟羽時代からはそれまで⁽⁴¹⁾

(37) 第一突厥可汗国の公用語・公用文字がソグド語・ソグド文字であったという見方は、ブグト碑文を紹介した護雅夫氏に由来し（護 1972, p. 85）、その後、同氏によって繰り返して述べられている。Cf. 吉田 1997, p. 236; 吉田 1991, pp. 73-76.

(38) Cf. Tekin 1968; 森安／オチル 1999.

(39) 護 1984, 第IV章「草原文学の源流」、特に pp. 264-265 参照。

(40) Cf. 森安／オチル 1999.

(41) Cf. Sundermann 1981; Sundermann 1986-87; Klimkeit 1993, Chap. XVII: Historical Texts (Iranian Texts), Chap. XXXI: Historical Texts (Turkish Texts); Wilkens 2000a, pp. 66-87 (Nos. 40-63); Tremblay 2001, pp. 237-238. ところで、吉田豊氏から「マニ教の教会史は、Sundermann のいくつかの論著で扱われたいわゆる教会史と、ウイグルでの布教・流通に関する教会史は別個のものとして扱う必要がある。前者は歴史文献というより聖者伝であり、後者は民族史の範疇に入るであろう」との注意を頂いた。無論、私がここでいう教会史の伝統とは、前者の伝統であるが、実際には両者の区別はそれほど容易ではない。クリムカイト本やヴィルケンス＝カタログでも両者が混在している。私の判断基準では狭義の歴史文献に入る牟羽改宗始末記を、Wilkens 2000a, No. 52 では「教会史的文書」としていることに注意されたい。

以上に強い歴史意識が形成されていったことであろう。既に述べた通り、Mainz 345 は楷書体の冊子本の一部であると判断される点も考慮すれば、これが歴史文献であったことを疑う余地はない。実は、ウイグル文献中には、他にも僅かながら同様のものの存在が知られている。クリムカイト氏は、マニ教トルコ語（ウイグル語）の歴史書で現在知られているのは2点のみと言う⁽⁴²⁾。そのうちの1点は、バング・ガバイン両氏によって TTT II, “Manichaica” で紹介されて以来有名な牟羽可汗マニ教改宗始末記 U 72 & U 73 (= TM 276 a & b = Wilkens 2000a, Nos. 52 & 53) である。もう1点は、ハブザという名のワルチャーン王の話 U 237 + U 296 (= Zieme, BTT V, No. 21 = Wilkens 2000a, No. 58) であるが⁽⁴³⁾、これは聖者伝的教会史の範疇に入るもので、厳密な意味での歴史文献ではない。一方、ウイグルにはルーン文字諸碑文を受け継いで草原諸民族史のようなものを作る流行があったと指摘するクラーク氏は、残された歴史文献として、牟羽改宗始末記と並べて U 1 (published in Le Coq 1912; = T II K 173 = Wilkens 2000a, No. 49) を挙げる⁽⁴⁴⁾。U 1 は複葉2枚(8頁分)の冊子本断簡であり、片方の複葉の4頁目(ルコックは2頁目とするが、それは私の判断では誤り；以下の頁数も同様)にウイグルのブグク汗が羊歳(803年)に高昌に来て慕闐に会って3人のマヒスタク設置を相談したこ

(42) Klimkeit 1993, pp. 363-368; Klimkeit 1999, p. 234.

(43) Clark 2000, p. 99. なお、クラーク氏の先行研究 Clark 1997, pp. 100-101, 131-132 では “Early Church History and Hagiography” という項目を設けて6点を挙げながら、Clark 2000, p. 99 では “apart from a few hagiographical pieces, the Turkic Manichaean corpus lacks the genre of church history *per se*.” と言うのは、分りにくい。

(44) “üč mxistak olurmaq” を単純に「3人のマヒスタクが座に着くこと」、即ち3人のマヒスタクの任命・設置と解釈することに対し、強い反論がある。即ちこれをマニ教徒にとって重要なイムキ祭 Yimki-festival と結び付けるヘニング説である、cf. Henning 1936a, pp. 14-15; Henning 1945, pp. 147-148, 155 (fn. 3); Asmussen 1965, pp. 178, 225-226; Rybatzki 2000, p. 260; Tremblay 2001, pp. 32 (n. 48), 238. 確かにヘニング説はある意味で見事であり、これをマニ教学とウイグル文献学の立場だけから覆すのは難しい。支持者が多いのもそのためである。しかし、私は歴史学の立場から、本文書のようにトルコ民族史上の大きな事件を列挙したと思しき歴史文献に「年毎に行われるイムキ祭」をわざわざ記述することはありえないと信ずる。ここはやはりウイグル=マニ教史上にたった一度起こった3人のマヒスタクの同時任命という特筆すべき出来事が記載されていると見るべきである。

とが記され、それに先行する別の頁には突厥宰相ビルゲ=トニユクク(1頁目)、ウイグルのイルテベル(この称号は突厥支配下に与えられたもの; 従ってウイグル建国以前の出来事)とバスミル(2頁目)、キュセン(=亀茲)(3頁目)が現われ、さらにもう片方の複製には「弟がハンに任命された」と言う記事、そして肅州という地名やいくつかの人名ないし称号が現われる。これなどは正しく古代トルコ民族史の名に相応しかつたものであろう。その他、マール=アンモとカムの話 U 36 + U 205e (= Wilkens 2000a, No. 47) のような聖者伝的教会史に入るものを合わせて歴史文献とすれば 20 点前後に達するであろうが、^(4 5) 狭義の歴史文献に限定するとわずか数点に過ぎない。その点から言っても、我々の Mainz 345 の存在価値は極めて高いのである。

第3節で見た通り、安史の乱に介入したウイグルの可汗は第2代の葛勒可汗(磨延啜)と第3代の牟羽可汗(移地健)の2人である。前者は756年に肅宗の要請を受けて即座に軍隊を出兵させ、肅宗のいる行在に近いオルドス地方を安定させただけでなく、翌757年にはウイグルの皇太子的存在であった長男を筆頭に据えた援軍を派遣し、長安・洛陽奪回に多大の貢献をなした。一方、後者の牟羽可汗は、762年秋、最初は史朝義の誘いに乗って唐を侵略するために自らが大军を率いて南下してきたのであるが、肅宗の後を継いだ代宗の必死の要

(45) ウイグルが突厥を先駆者とみなす歴史意識を持っていたことは、U 1の外に、タリヤト碑文にウイグルの先祖としてブミン可汗を含む突厥の始祖3人を列挙している事実からも窺える。Cf. 片山 1999, pp. 168, 171, 172. 因みに、Tremblay 2001, p. 238 では U 1 を歴史文献としてとらえながら、突厥のトニユクク関係の記事とウイグルのブグク可汗の記事とが同時に現われることを奇妙なものと評している。しかしそれは、ウイグルは突厥にシンパシイを持っていなかったはずという「思い込み」が前提になっており、それがそもそもおかしいのである。

(46) Clark 2000, p. 99 で狭義の歴史文献としていた牟羽改宗始末記 U 72 & U 73 並びに古代トルコ民族史ともいふべき U 1 を、Clark 1997, pp. 101-103, 132 では “Documents from the Eastern Church” という項目に分類している。ヴィルケンス=カタログを見ても分かるように、これらの分類はまだ揺れ動いている。ただし、今後は少なくとも、教会史や狭義の歴史文献を含む「典籍」Books と、個人的書簡や寺院経営などに関わる「文書」Documents とは截然と区別されねばならない。

請を受け容れ、結果的に唐側の味方となって行動し、安史の乱を終結させたのである。客観的に見れば、磨延啜と牟羽の両者とも唐に大恩を売ったわけで、いずれの功績が大きいかわかる事はむずかしいはずである。いや、牟羽の可敦(可汗の正妻)が唐の臣下たる僕固懷恩の娘に過ぎなかったのに対し、磨延啜の可敦である寧国公主は肅宗皇帝の実の娘であったのであるから、ウイグルにおいてはむしろ磨延啜の方が高く評価されて然るべきとさえ言えよう。

ところが、ウイグルの首都オールドバリクに残された第8代保義可汗時代の巨大な記念碑であり、ウイグルの重要な公式歴史文献ともいべきカラバルガスン碑文(ウイグル語・ソグド語・漢文の3種で記述される)⁽⁴⁸⁾は、安史の乱に介入して功績を挙げた者としては牟羽可汗を顕彰するばかりで、磨延啜をまったく無視しているのである。というより、そもそもカラバルガスン碑文漢文面において磨延啜に関わる部分は、我々の碑文復元案によれば⁽⁴⁹⁾、19字の即位記事とそれに続いて事績を述べたわずか8文字の合計27字だけであって、牟羽の事績に400字以上を費やしているのとは極端な違いがある。ウイグル史上、磨延啜に顕彰すべき功績がほとんどなかったのならばともかく、唐との外交関係で大きな成果を挙げたのは上述の通りである。また漠北でも、対外的には西北方エニセイ河上流域のチク族やキルギス族、西方アルタイ山地方のカルルク族に対し赫赫たる武勲を立てて東ウイグル可汗国の版図を拡大し、対内的にはモンゴル草原の重要拠点にシネウス、タリウト、テスの3碑文を建てさせ、オルホン河畔のオールドバリクの造営を推進し、さらに西北のセレンゲ河の支流に沿ってソグド人と漢人のためにバイバリクという都城を建造させるなど、実子の牟羽と比べ

(47) ただし、寧国公主の「添い嫁」として共に磨延啜に降嫁した栄王の娘が、磨延啜死後に寧国公主が唐に帰国した後ウイグルに残り、磨延啜と牟羽2代の可敦となって少寧国公主と号したという事実はある。Cf. 佐口 1972, pp. 346, 406; Mackerras 1972, pp. 104-107.

(48) Cf. 羽田 1957, pp. 303-324; 吉田 1988; 森安/吉田/片山 1999.

(49) 森安/吉田 1998, pp. 155-156; 森安/吉田/片山 1999, pp. 211-214. 漢文面の行数を34行とすることに変更はないが、その後の研究により、カラバルガスン碑文漢文面の1行の文字数はさらに90文字にまで増えている。

でも決して遜色のない偉大な人物であった。⁽⁵⁰⁾ ならば、なに故にカラバルガスン碑文における記述量が両者間でそれほどにかけ離れているのであろうか。私の考えでは、その理由は以下の通りである。

周知のように、東ウイグル可汗国を建設したヤグラカル氏の血統は第6代で断絶し、エディズ(Ädiz; 阿跌=跌跌)氏出身の骨咄祿將軍すなわち宰相イル=オゲシ(頡于迦斯= Il Ögäsi)が、国人に推される形をとった無血革命により、第7代懷信可汗として即位した。つまり795年、王統がヤグラカル氏からエディズ氏に代わったのである。カラバルガスン碑文はエディズ氏の懷信を嗣いだ第8代保義可汗が、先代の功績に自分の功績を重ね合わせて書き残そうとしたものであり、はじめからヤグラカル氏の可汗6代の事績については冷淡であった。我々の碑文復元案によれば、本来は碑文の漢文テキスト全体の三分の二以上が懷信・保義2人の事績で占められていたはずである。残りの三分の一弱にあたる最初の11行のうち、冒頭2行はタイトルと碑文作成者たちの名前である。3行目から実質的な本文が始まるが、3行目行頭から5行目の半ば過ぎまでが、東ウイグル可汗国成立以前、すなわち突厥支配時代の歴史、5行目の下方から11行目までの正味6行分にヤグラカル氏の可汗6代の事績を記述している。といっても、第3代の牟羽可汗以外の5人については、磨延喲の記述と大差なく、いずれもごく短い美辞麗句のみである。歴史的記述として実質があるのは、正味4行半(400字以上)に及ぶ牟羽の箇所だけであり、しかもそのうちの100字以上が安史の乱関係で、残りの260字以上がマニ教関係の記述である。牟羽可汗がマニ教のウイグル流入を公認し、安史の乱征伐中の洛陽近郊でソグド人と思しきマニ僧に出遭ってそれを本国に連れ帰り、後にマニ教が国教化する基礎を置いたことは、いまさら繰り返すまでもない有名な話であるが、牟羽

(50) Cf. 羽田 1957, pp. 192-202. テス, タリアト, シネウス 3 碑文の最新の訳註を, 森安/オチル 1999, pp. 158-195 において大澤孝, 片山章雄, 森安が分担執筆している。

(51) Cf. 安部 1955, pp. 170, 266; 佐口 1972, pp. 348, 407; Mackerras 1972, pp. 10, 107, 109; Mackerras 1990, pp. 318-319; 護 1992, pp. 165-166.

可汗に対してクーデタを起こし、可汗とその側近のソグド人を大量に殺害して即位した第4代可汗頓莫賀達干はマニ教を迫害した(cf. 田坂 1940)。そしてそのマニ教迫害という状況は第5～6代可汗の時も続いたが、ようやくエディズ氏の懐信可汗の時代になってマニ教は復活し、以後、本格的に国教化していった。⁽⁵²⁾ こうした情勢のもとに作られたカラバルガスン碑文は、実は単に現可汗の功績を最大限に讃えるために、建国以前の歴史から説き起こした歴史的記念碑であるだけでなく、一面ではマニ教会の歴史を述べ、以後益々の発展を願うものでもあったのである。だからこそ、血筋の異なる者であるにもかかわらず、ウイグル＝マニ教会にとっては最大の功労者である牟羽可汗について、例外的に詳しく記述したのである。バイバリク建設に見られるように、磨延啜とソグド人の関係も決して浅くはなかったのであるが、彼はソグド人の伝えたマニ教と関わりを持たなかったが故に、本碑文では称揚されなかったのである。

カラバルガスン碑文漢文面の構成についての以上のような分析結果は、同碑文ソグド語面についても言えるのである。というよりむしろ、ソグド語面の構成が先にあつて、それを元にしながら漢文面が構成されたのかもしれない。なぜなら、マニ教団には教会史の伝統があつたが、ウイグルにその伝統を持ち込んだのはソグド人に違いないからである。⁽⁵³⁾ 他方、殆どが毀損しているウイグル語面の構成についてはもはや不明であるが、それでも私が新たに判読し得た箇所を含め、現時点で僅かに残された部分にマニ教関係の術語が目につくのは絶

(52) Cf. 森安、卒業論文(第6節中に言及)；Mackerras 1990, pp. 333-335.

(53) 先に言及した牟羽可汗マニ教改宗始末記の原文を、バング・ガバイン両氏が漢文かソグド語のどちらかと推定したのに対し、アスムッセン氏はこれをソグド語と断定した。その根拠は、ウイグル語の本文中に *γw'n* 「罪」というソグド語が混じっていたことである。クリムカイト氏・クラーク氏もソグド語説を支持する(TTT II, pp. 411-412; Asmussen 1965, p. 147; Klimkeit 1999, p. 234; Clark 1997, p. 102; Clark 2000, p. 102)。もしそれが正しければ、カラバルガスン碑文の性格を考える上でも興味深い。同碑文が磨延啜の諸碑文のようなトルコ民族の伝統とソグド文字文化の伝統の両方を受け継いでいることになるからである。因みに、Rybatzki 2000, p. 259 では、この牟羽改宗始末記自体は東ウイグル可汗国時代のものではなく、西ウイグル時代の写本とみなしている。

対に偶然ではありえない。⁽⁵⁴⁾

さて、以上のようなカラバルガスン碑文に対する見方は、実はそのまま我々の扱っている断簡 Mainz 345 にも当てはまるのである。私が表と判断した面の 1～3 行目の蒙塵の主語は玄宗であり、その後の文面を素直に受け取れば、蒙塵の直後にウイグルに援軍要請の請願書を送った中国皇帝は肅宗であり、それを受け取ったウイグルの可汗は磨延啜であるはずである。しかしながら、もう一度カラバルガスン碑文に戻ると、漢文面第 6 行目に「帝蒙塵，史思明[之子史朝義]」とあるのも、ソグド語面第 9 行目に見える援軍要請の請願書が来たのも、共に牟羽可汗時代の記事となっていたことに気付かされる。

ここで改めて、カラバルガスン碑文の牟羽可汗に関する記述を見てみよう。ソグド語面は、新テキストと訳註を準備中の吉田豊氏の許可を得て和訳の全文を引用し、漢文面は私が作成中の新テキストより、安史の乱に関わる部分全体と、それに続くマニ教導入に関わる部分の最初だけを原文のまま（訳註は別に発表予定；[補注 3] 参照）引用する。

ソグド語面

8 行目：【第 3 代牟羽】可汗として位についた、男として奇特で、すべてのあり方で特別であったから、彼が支配者の位に就いた時、四方に驚愕と畏れが広まった。（彼の）天運と幸運のゆえに [] と智恵のゆえに、技倆と [男らしさのゆえに] …

9 行目：そして（／と）言葉（＝請願書）が来た。次のように（書いてあった）：「この苦難から救って下さい。援助して下さい。」神である王（＝可汗）がこの言葉（＝請願書）を聞いた時、自ら強力な軍隊とともに天子の居所（βpwrstn; 中国を指す）⁽⁵⁵⁾にお進みになられた【牟羽の中

(54) 森安／吉田 1998, pp. 150-153; 森安／吉田／片山 1999, pp. 219-224.

(55) βpwrstn「天子の居所」は中国すなわち唐王朝全体を指している。吉田豊氏によれば、その根拠は、敦煌出土ソグド語仏典 Pelliot Sogdien 8 の奥書にある仏典が「康姓の Cwr'kk 及びその一族の廻向のため、βpwrstn の敦煌で翻訳された」と述べられている。↗

国進駐】。その軍隊は・・・

10 行目：彼らは再び戦闘を行なった。すべての外教の信者(=異教徒)たちは神なるマール=マーニーの宗教をそれほど[]したので、この 'npt / 'δpt は追放された。神である王(=可汗)は強力な軍隊とともにここオチュケンの地で[]を彼らは打った、取った。・・・(Fr. 6)・・・数に於いて四[人のマニ僧?]・・・

11 行目：我々は[]に仕えている。そして逆さまの法(邪教)を保持している。悪魔に仕えている。今、神である王(=可汗)の・・・がこの手(で?)、すべての火を燃やす宗教(の代わりに?)、神であるマール=マーニーの宗教を受け入れ(た?)。それから神である王(=可汗)は[]と宗教を受け入れた。・・・(Fr. 6)・・・汝らは受け入れることができない。・・・

12 行目：その時、神である王(=可汗)は同意(／満足)した。(そして)命令を発した。(曰く)：「(汝らは)受け入れなさい。そのゆえに(?) (私たちは)悪魔に仕え、お供えをし、信仰してきた。軽蔑すべき手・・・我々は偶像を γr't'kw という名前の土地ですべて焼こう(／焼いた)。偉大な神である[王(=可汗)と]王子たち(?)・・・神であるマール=マーニーの宗教・・・(Fr. 6)・・・下方へ神であるマール=ネーウ=ルワーン慕闐 (βyy (mry) nyw(rw) 'n m(w) z- 'k(') [] した時・・・(Paris)・・・[すべての地方?]で・・・

13 行目：広まった、中断することなく。牟羽可汗が身体を棄てた(みまかつ

↘ ことである。実際、「天子の居所」が「首都」すなわち長安を意味することはありえない。なぜなら、牟羽可汗の軍は洛陽には進駐したが、長安には行かなかったからである。両唐書ウイグル伝によれば、牟羽可汗の軍はゴビ沙漠を越えて陰山山脈方面に入った後、太原を経て山西省をおそらく汾水沿いに南下し、陝州付近で黄河北岸の地に本営を置いた。そしてそこで、雍王适(後の徳宗)を兵馬元帥とし、僕固懷恩らを首脳とする唐軍と合流し、東に向かって洛陽を奪回した。それ以後も唐皇帝のいる長安には立ち寄ることなく帰国したのである。Cf. 佐口 1972, pp. 324-329, 384-388; Mackerras 1972, pp. 68-75.

た)時、かくして【第4代】Alp Qutluγ Bilgä 可汗が位に就いた。(以下省略)

漢文面

5行目:(行末) □□□□□【子 登里】

6行目:囉没蜜施頡翳德蜜施毗伽可汗嗣位【第2代磨延啜】。英智□□, □

□經營。子 君登里囉汨没蜜施頡咄登蜜施合俱録□□【毗伽可汗嗣

位】【第3代牟羽】。□□□□, 奇特異常, 宇内諸邦欽伏。自□□□□

□帝蒙塵, 史思明【之子朝義】□□□□□□□□□□

7行目:使, 幣重言甘, 乞師併力, 欲滅唐社。 可汗忿彼孤恩, 竊弄神器,

親統驍雄, 與王師犄角, 合勢齊駢, 剋復京洛。 皇帝□□□□□□□

□□為兄弟之邦, 永為□□□□。 可汗乃頓軍東都, 因觀風□□□□

□□□□□□□□□□【法】

8行目:師將睿息等四僧入國。闡揚二祀, 洞徹三際。況法師妙達明門, 精通

七部, 才高海岳, 辯若懸河。故能開正教於迴鶻。(以下省略)

ソグド語面では請願書は一度きりしか来ていないが, Mainz 345では「何度も」来たのであり, 当然ながらそれらは肅宗から磨延啜への要請と, 代宗から牟羽への要請とを合わせて述べたからである。肅宗から磨延啜への要請は複数回行なわれた可能性が高いが, 代宗から牟羽への要請は時間的に見て恐らく1回しかチャンスがなく, しかも牟羽はそれを南下後に中国本土内で受け取ったのである。それゆえ, Mainz 345に見えるように「何度も」請願を受けた可汗が牟羽1人ではありえないのである。また牟羽の中国遠征はもともと史朝義の要請に応じたものであって, 唐側の要請に応じたわけではなかったのだから, Mainz 345表面に記された事績は論理的には磨延啜のもでなければならない。

しかし, おそらくは全てが牟羽の事績として扱われているのであろう。それが第7代懷信可汗以後, マニ教会を全面的に支え, マニ教を国教とする史上唯一の国家となったエディズ朝東ウイグル可汗国並びにそれを受け継ぐ西ウイグ

ル王国の公的態度だったからに違いない。そうであれば、当然ながら、この態度、換言すれば安史の乱征伐とマニ教導入の功績を牟羽可汗に一本化する方針が、国家ないし王朝からの全面的保護を享受しているウイグル=マニ教団全体の立場でもあり、ウイグル時代に入ってからマニ教教会の歴史を述べる公式文献の記載もその方向に統一されたことであろう。

そもそも公式に残される歴史文献というものは、どこでも自分に都合の悪い事実を隠蔽しようとするものである。ウイグル側のカラバルガスン碑文でも、牟羽可汗の南征軍が本当は史朝義の要請に呼応し、協同で新たな「征服王朝」を作るために出動した（これは中国側漢文史料から判明する事実）にもかかわらず、牟羽はいかにも最初から史朝義の要請を唐朝の恩顧に対する裏切り行為として断罪し、徹頭徹尾唐の味方であったかのように記述している。一方、中国側史料におけるこのような略筆、あるいは中華主義的改竄はそれこそ枚挙にいとまがない。ほんの一例を挙げれば、カラバルガスン碑文ソグド面と Mainz 345 から分かるように唐からの援軍要請はせっぱつまったものだったのに、漢籍ではニュアンスがかなり異なる。『旧唐書』本紀（中華書局版、p. 243）の至徳元載（756年）8月の条では、9月に肅宗が敦煌王や僕固懷恩らを派遣してウイグルの助力を依頼する前に、いかにもウイグルと吐蕃の方が先に唐に「和親を請い、助國討賊を願った」とし、『新唐書』回鶻伝（中華書局版、p. 6115）でも月日こそ書かないがやはりウイグルから先に願い出があったので敦煌王や僕固懷恩を派遣した⁽⁵⁶⁾というのは、まさに噴飯ものである。「和親を請」わねばならなかったのは唐の方であって、絶対にウイグルや吐蕃ではなかったのである。

第6節 早すぎた征服王朝としての安史の乱とウイグル

主として中国史研究者が、安史の乱の原因を中国の内部事情に求めてきたことは、既に指摘した通りである。谷川道雄氏は、安史の乱に多くの異民族が参加したことに着目したにもかかわらず、「この戦乱は、あたかも北方民族の中国

(56) Cf. 佐口 1972, p. 376; Mackerras 1972, p. 55.

に対する『外寇』であるかのような感じを起こさせる。しかし、それは、あくまで、唐朝節度使安祿山が、玄宗の側近楊国忠との対立のすえにひきおこした『内乱』であった⁽⁵⁷⁾と主張した。一方、藤善真澄氏は、恐らく陳寅恪氏の説を受け、安史の乱を内乱ではなく、中国民族と異民族との民族闘争であるととらえる見方を紹介したが、それも賛意は半分に留めざるを得ない。またクラーク氏 (Clark 2000, p. 114) は、安史の乱の原因を、主として中国国内に求めてきた従来の見方を批判し、ウイグル帝国の出現及びその西域(天山地方)進出に絡めようとしたが、わずか一言であって十分ではない。

私は第1節で述べたように、長期波動で見る世界史の必然的流れの中で安史の乱を捉え、もし成功していれば「安史王朝」という名の征服王朝を樹立していたとみなす。失敗したから、「早すぎた征服王朝」というわけである。

ではなぜ安史の乱は征服王朝たりえなかったのであろうか。私の結論では、それは中央ユーラシア側勢力がまとまらなかったから、具体的にはウイグルに邪魔されたからである。安史の乱を起し、それを維持した背景に、遊牧騎馬民族の軍事力と、シルクロード貿易による経済力の両方があったことは、既に榮新江氏によって指摘されている⁽⁵⁸⁾。つまり征服王朝となる条件は十分に備えていたはずなのであるが、最終的には安史勢力はウイグルを味方に取り込むことができず、軍事的に破綻したのである。

ところで、私が「早すぎた征服王朝」の視点を提唱するのは、実は安史の乱勢力についてだけではない。同時にウイグルについても言っているのである。なぜウイグルは、安史の乱勢力と組んで、征服王朝を建てなかったのか。軍事的には機は十分に熟していたはずであり、まさに史朝義との連合には、その可能性があった。本節ではこの点を検討する。

ウイグルから見れば、安史の乱への介入は決して単なる援助・救援ではない。唐支配下にあった安西四鎮の1つである都市国家コータンや、さらに遠方

(57) 谷川 1954, p. 80.

(58) 藤善 1966 (2000), p. 182; 藤善 1972, pp. 36, 126, 198-199.

(59) 榮新江 1998, p. 767.

の拔汗那・大食からの援軍とは訳が違う。第1節で述べたような中央ユーラシア史の大きな流れを踏まえるならば、ここでは磨延啜・牟羽兩可汗が、治下のソグド人によってユーラシア東半部に張り巡らされていたネットワークから集めた情報をもとに、ソグド人政商やソグド系武将とも相談の上、明らかな目標を持って安史の乱に積極的に参入したのではないか、というような発想の大転換が必要である。玄宗皇帝の長安から蜀（四川）への蒙塵は天宝十五載（756年）6月に起こり、翌7月に行在の靈武で即位した肅宗皇帝は、9月にウイグルの磨延啜可汗への救援要請の使節団を派遣した。それが漠北オルホン河畔にあったウイグルの本拠地に到着し、磨延啜可汗と会見したのは多分10月である。そして早くもその翌月から翌々月にはウイグル軍が唐の郭子儀軍と合流して、安史勢力側の阿史那從礼軍を撃破し、少なくともオルドス地方一帯に平安をもたらした。この間の至徳元載（756年）8月に、まず最初にウイグルの方から自発的に援軍の申し出があったとする『旧唐書』本紀（中華書局版、p.243）の記事を、中華主義的史家の捏造とみるか、それともそこにウイグル側の隠された意図があったとみるかは、意見の分かれるところであろう。

6世紀の中葉以来、遊牧騎馬民族世界の覇者は突厥であった。同じく遊牧騎馬勢力の鮮卑拓跋部の流れを汲みつつ中国をまとめ上げた唐の実質的な建国者たる太宗・李世民との戦いに敗れて、雌伏を余儀なくされたものの、7世紀末に突厥は力強く復興した。ウイグルは長らくその支配下にあったが、740年代前半、まず同じトルコ系のバasmil・カルルクと連合して突厥を破り、次いでカルルクと共にバasmilを打倒、さらにはそのカルルクを西に放逐してモンゴリアに単独政権を樹立した。これらの軍事行動をリードしたのは初代可汗となった骨力裴羅（闕毗伽可汗）であるが、彼は即位からわずか3年後の747年には逝去し、その後を磨延啜が継いで八姓オグズ・九姓タタル・キルギス・チク・三姓カルルクなどを制圧して漠北を統一した結果、ついに西域（天山山脈～

(60) 稲葉 2001 は、この大食軍がアッバース朝からの正規軍ではなく、ホラーサーン～西トルキスタンにあった反アッバース勢力に由来する傭兵であることを論証する。

タリム盆地)～河西回廊～漠南(内モンゴリア)への進出が望めるまでになってきたのである。安史の乱が勃発したのは、まさしくそのような情勢下であった。

ではウイグルが安史の乱に参入した真意はどこにあったのだろうか。かつてモージス氏は、ウイグルは唐朝に臣属していたから援助を当然の義務と考えたという中華主義的見方を斥け、突厥第二可汗国の滅亡時に中国に亡命していた突厥集団を、最初は安史勢力側にいた旧突厥王族の阿史那從礼が糾合したので、ウイグルが対抗措置をとったのであるという見解を示した。そしてそれは最近の杉山正明・カマロフ両氏にも受け継がれている。

杉山氏は次のように言う：「崩壊しかけた唐朝の支配は、新興のウイグル遊牧国家の援軍によって救われた。ウイグル側からすれば、たんに唐朝からの救援要請にこたえたというだけでなく、自分たちが倒した東突厥が、安氏王朝と姿を変えて、中華帝国として復活するのを座視できなかった面も考えられる」⁽⁶¹⁾。

カマロフ氏の見解はさらに詳しい。安史の乱勢力側には、阿史那從礼や阿史那承慶のような突厥の王族が加わっており、三度目の突厥可汗国復興を狙っていた。またウイグルが属する部族連合体であった九姓鉄勒の中にも、ウイグルに背いて敵側に与する同羅のような集団がいた。このように中央ユーラシア東部世界においてもウイグルの支配が未だ万全ではなく、突厥復興の可能性がある限り、ウイグルの利害は唐朝のそれと完全に合致した。それゆえウイグルは、磨延啜自らの遠征を始め、全力を挙げて安史勢力打倒に邁進したのである、という。つまり同氏の見方を図式化すれば、「安史の乱勢力+旧突厥+九姓鉄勒の一部」対「唐朝+ウイグル+九姓鉄勒の大部分」という構図になる。⁽⁶²⁾

確かに磨延啜時代に限っていえば、このような旧突厥勢力の復活阻止という一面があった可能性は認められる。しかし、繰り返した述べてのように、牟羽可汗の時代に入り、ウイグルは史朝義の勢力と組んで、唐王朝自身を打倒するために中国に侵入しているのであるから、このような見方を全体に及ぼすと、単な

(61) 杉山 1997a, p. 250.

(62) Kamalov 2001, pp. 250-251, 253; A. K. Камалов, *Древние Уйгуры, VIII-IX вв.* Алматы 2001, cf. *Newsletter of the Circle of Inner Asian Art* 13, 2001, SOAS, pp. 53-54.

る結果論に陥ってしまう。特にこの時ゴビ沙漠を越えてきた牟羽可汗軍には、少なく見積もっても4千の壮丁と4万の軍馬、そして可敦を始めとする老幼子女が1万以上、牛羊は無数にいたというから、征服後の本格的移住まで視野に入れていたと思われる。

さらに忘れてならないのは、牟羽可汗は、安史の乱が終息した763年の8月、唐側の僕固懷恩が反乱を起こすと、やはり中央ユーラシア勢力として成長著しい吐蕃と手を組んで、妻の実父である僕固懷恩を助けようとしたことである。いうまでもなく僕固懷恩はウイグルと同じ九姓鉄勒に所属する僕固(僕骨)部出身のトルコ人武将であり、その配下に遊牧騎馬民族出身の軍団を率いていたのである。懷恩側勢力はウイグル・吐蕃・吐谷渾・党項・奴刺を合わせて20万以上に達したという。実はここにも征服王朝成立の芽はあったのであるが、懷恩の病死後、ウイグルは吐蕃と袂を分かち、再び唐についた。

しかしながら、この後も牟羽は決して中国侵攻の意志を放棄していない。大暦13年(778年)、頓莫賀達干^{タルカン}をして太原地方に侵入させ、羊馬数万を獲得しただけでなく、翌大暦14年(779年)には、本格的な中国征服を企図したのである。すなわちこの年5月、中国で代宗が逝去し、徳宗が即位すると、牟羽は側近のソグド人の意見をいれ、国を挙げて中国を目指し南下しようとしたのである。⁽⁶⁴⁾これがいかに大事件であったかを、さすがに羽田亨氏は認識していた。同氏は、牟羽の治世全体を見渡して「此の時代には回鶻の勢力は全く唐を抑圧し、唐は其の下に在りて、辛ふじて社稷を保つに過ぎざりしが如し」と総括すると共に、「此の(南下の)計画にして実現せられしならば、その結果の史上に残されしもの、決して他の侵寇の場合に於るが如きに止まらざりしなる可きを信じて疑わず」と述べている。⁽⁶⁵⁾ただしこの牟羽の壮図は、従父兄の頓莫賀達干らのクーデタによって挫かれ、牟羽はその与党と側近のソグド人(九姓胡)を合わせ

(63) Cf. 佐口 1972, pp. 325, 385; Mackerras 1972, pp. 70-71. 「十万」とも称される大軍とは、壮丁・子女・馬牛羊を合計した数であったかも知れない。

(64) 羽田 1957, pp. 203-205. Cf. 佐口 1972, pp. 332-340, 389-394; Mackerras 1972, pp. 78-89.

(65) 羽田 1957, pp. 208-209.

た約 2000 人と共に殺されたのである。田坂氏によれば、「(頓莫賀達干らは) 恐らく摩尼教徒を中心とする九姓胡一派の跳梁に快らず、平生密かにその勢力転覆の機を窺っていた反動的・守旧的な国粋党であつたに相違ない。頓莫賀の一挙は彼等一派の回紇社会内に台頭した新興勢力打倒の運動に他ならぬ⁽⁶⁶⁾」という。つまり、マニ教の公伝を許しただけでなく、自らもマニ教に改宗し、マニ教徒と表裏一体であるソグド人を優遇した牟羽の「革新的」政策は、いまだ国人の圧倒的支持を得るには至らなかったということである。

ところでクラーク氏はつい最近、マニ教典籍断片 U 111 (= T II D 180 in TTT II, pp. 425-6; マニ文字; ウイグル語とパルティア語) の再解釈により、牟羽可汗がマニ教に改宗したのは 762/763 年、中国遠征中に洛陽近郊でマニ僧と出会った時であるとするシャヴァンヌ・ベリオ以来の定説を斥け、761 年以前に本国内か西域のどこかであるという新説を提唱する大論文を発表した。その論拠をいちいち検証する作業はここでは避けるが、その結論の大枠は偶然にも私が昭和 46 (1971) 年度に東京大学文学部に提出した卒業論文「東ウイグル帝国の摩尼教に就いて」と合致する。私の卒論では、牟羽可汗を中心とするウイグル人たちのマニ教への改宗の理由として、シルクロード貿易を押さえるソグド人を活用するためという経済的理由を第一に挙げ⁽⁶⁷⁾、そうであれば 762/763 年の中国遠征を待つ必要はなく、むしろもっと前であるべきだと推測した。そして改宗に伴ってますます多くのソグド人を抱え込んだ結果として文字文化が流入し、後の西ウイグル時代に顕著になる定住化への方向性が決まったと考えた。本稿に引きつけて言い換えれば、牟羽のマニ教改宗と中国征服の意図とは、ソグド人の存在と活動を介することによって、密接に結びついていたと考えられるのである。

(66) 田坂 1940, p. 226. ただし林俊雄氏は、頓莫賀のクーデタの原因として、田坂説の外に経済政策上の対立を挙げる。匈奴から突厥に至る遊牧国家が中国北辺への犯塞入寇を繰り返したのと違って、ウイグルは交易重視へと政策転換したという林氏の指摘は重要であるが、牟羽だけが例外的に犯塞入寇という古来の手段を採ったという点には賛成できない。これだと保守派が逆転してしまう。Cf. 林 1992, pp. 111, 123-124, 132.

(67) この私の見解は書信によってマッケラス氏に伝えられ、『ケンブリッジ内陸アジア古代史』に採用された。Cf. Mackerras 1990, p. 331.

ソグド人という優秀なスタッフを抱えたウイグルが、さらに進んで「征服王朝」(第1節参照)となるには、自らが漠南か西域に進出しなければならない。私は牟羽可汗には一貫してその意志があり、しかもそれをソグド人側近が支えていたと推測する。しかしながらウイグル全体としては未だそのような意識にまで達していなかった。則ち、第1節で見たように、狭義の征服王朝へと向かっていく遊牧騎馬民族史の長期的流れ(長期波動)の中において、牟羽の政策はまだ「早すぎた」のである。

安史の乱もウイグルも、いずれも征服王朝樹立にまで至らなかったのには、いろいろな理由があったであろうが、私は、要するに中央ユーラシア側の遊牧騎馬民族勢力が一体化して「南方」を支配する「システム」(第1節参照)が熟しておらず、時期尚早であったと考えるのである。しかしながら、両者が中央ユーラシア史上に演じた役割は極めて大きかった。次の時代になって、ウイグルは自らが西ウイグル王国と甘州ウイグル王国という中型・小型の征服王朝を作ったが、それだけでなく、トルコ系沙陀族が「ソグド系突厥」を含む安史の乱の残存勢力と共に作り上げた五代の沙陀諸王朝(後唐・後晋・後漢)⁽⁶⁸⁾、さらには契丹族の建てた遼王朝、タングート族の西夏、カルルク族中心のカラハン朝という征服王朝の成立にも多大の影響を与えたのである。

最後に一言付け加えたい。私は安史の乱の原因を中国史内部に求めるのが誤りだと主張しているのではない。ただ、その原因を中国国内のみに求める視点では全く不十分であると言っているのである。安史の乱は、中国史の中では律令支配の破綻にともなう募兵制への移行(徴兵制から傭兵制への移行)や、新興の科挙官僚と貴族出身の財務官僚との対立、そして唐後半から五代に至る藩鎮体制の形成や貴族政治の終焉などと緊密に結び付けて考察されてきたが、私の目には藩鎮体制さえも中国史の枠を越えて、中央ユーラシア史の流れの中において再考すべきものと映っているのである。⁽⁶⁹⁾中国史の側からの積極的な議論を期待したい。

(68) Cf. Pulleyblank 1952b, pp. 341-347; 樊文礼 2000, 蔡家藝 2001.

(69) Cf. 稲葉 2001, p. 29.

略号

- APAW = Abhandlungen der Preußischen Akademie der Wissenschaften, Phil.-hist. Klasse, Berlin.
- BTT = Berliner Turfantexte.
- ED = G. Clauson, *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*. Oxford 1972.
- GSR = B. Karlgren, *Grammata Serica Recensa*. Stockholm 1957.
- Manichaica I-III = Albert von Le Coq, *Türkische Manichaica aus Chotscho*, I-III. APAW 1911-6, 61p.; 1919-3, 15p.; 1922-2, 49p.
- MOTH = J. Hamilton, *Manuscripts ouïgours du IX^e-X^e siècle de Touen-houang*. 2 vols., Paris, Peeters, 1986.
- TMEN = G. Doerfer (ed.), *Türkische und mongolische Elemente im Neupersischen*. 4 vols., Wiesbaden 1963-75.
- TTT = Türkische Turfan-Texte.
- VWTD = W. Radloff (ed.), *Versuch eines Wörterbuches der Türk-Dialecte*. 4 vols., St. Petersburg 1893-1911. (Repr.: 's-Gravenhage 1960.)

文献目録 (ABC順)

安部 健夫

- 1955 「西ウイグル国史の研究」京都, 彙文堂書店.

Arat, Rahmeti R.

- 1964 “Der Herrschertitel Iduq-qut.” *Ural-Altäische Jahrbücher* 35, pp. 150-157, +1 pl.

Asmussen, Jes P.

- 1965 *X^uästvānift. Studies in Manichaeism*. (Acta Theologica Danica, Vol. 7), Copenhagen.

蔡 家藝

- 2001 「沙陀族歴史雑探」『民族研究』2001-1, pp. 71-80.

Chavannes, Éd. / P. Pelliot

- 1913 “Un traité manichéen retrouvé en Chine (Deuxième partie).” *Journal Asiatique* 1913 jan.-fév., pp. 99-199 & mar.-avr., pp. 261-394.

Clark, Larry

- 1997 “The Turkic Manichaean Literature.” In: Mirecki, P. & J. BeDuhn (eds.), *Emerging from Darkness. Studies in the Recovery of Manichaean Sources*, (Nag Hammadi and Manichaean Studies 43), Leiden / New York / Köln: Brill, pp. 89-141.
- 2000 “The Conversion of Bögü Khan to Manichaeism.” In: R. E. Emmerick, W. Sundermann and P. Zieme (eds.), *Studia Manichaica. IV. Internationaler Kongreß zum Manichäismus, Berlin, 14.-18. Juli 1997*, (Berichte und Abhandlungen der Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften, Sonderband 4), Berlin, Akademie Verlag, pp. 83-123, incl. 3 pls.

江上 波夫

- 1987 「中央アジアにおける人種・民族・文化の形成と歴史の流れ」江上波夫(編)『世

界各国史 16 中央アジア史』東京，山川出版社，pp. 3-106.

樊 文礼

2000 『唐末五代的代北集团』北京，中国文联出版社.

藤善 真澄

1966 (2000) 『安祿山——皇帝の座をうかがった男——』(中公文庫 648)，東京，中央公論新社，2000. (1966 年初版の人物往来社版は未見.)

1972 『安祿山と楊貴妃——安史の乱前後——』東京，清水書院.

Gabain, Annemarie von

1949 "Steppe und Stadt im Leben der ältesten Türken." *Der Islam* 29-1/2, pp. 30-62.

Gulácsi, Zsuzsanna

2000 "Rules of Page Arrangement in Manichaean Illuminated Book Fragments." In: R. E. Emmerick et al. (eds.), *Studia Manichaica. IV. Internationaler Kongreß zum Manichäismus, Berlin, 14.-18. Juli 1997*, Berlin: Akademie Verlag, pp. 270-307.

2001 *Manichaean Art in Berlin Collections. A Comprehensive Catalogue of Manichaean Artifacts Belonging to the Berlin State Museums of the Prussian Cultural Foundation, Museum of Indian Art, and the Berlin-Brandenburg Academy of Sciences.* (Corpus Fontium Manichaeorum, Series Archaeologica et Iconographica, 1), Turnhout (Belgium): Brepols.

羽田 亨

1957 「唐代回鶻史の研究」『羽田博士史学論文集 上 歴史篇』京都，東洋史研究会，pp. 157-324.

林 俊雄

1992 「ウイグルの対唐政策」『創価大学人文論集』4, pp. 111-143.

Henning, W. B.

1936a "Neue Materialien zur Geschichte des Manichäismus." *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 90, pp. 1-18.

1936b *Ein manichäisches Bet- und Beichtbuch*. APAW 1936-10, 143p.

1938 "Argi and the "Tokharians"." *Bulletin of the School of Oriental Studies* 9-3, pp. 545-571.

1945 "The Manichaean Fasts." *Journal of the Royal Asiatic Society* 1945, pp. 146-164, +1 pl.

堀 敏一

1951 「唐末諸叛乱の性格——中国における貴族政治の没落について——」『東洋文化』7, pp. 52-94.

稲葉 稜

2001 「安史の乱時に入唐したアラブ兵について」『(龍谷大学) 国際文化研究』5, pp. 16-33.

Kamalov, Ablet K.

2001 "Turks and Uighurs during the Rebellion of An Lu-shan Shih Ch'ao-yi (755-762)." *Central Asiatic Journal* 45-2, pp. 243-253.

片山 章雄

- 1999 「タリят碑文」森安孝夫・オチル（共編）『モンゴル国現存遺蹟・碑文調査研究報告』豊中，中央ユーラシア学研究会，pp. 168-176.

Klimkeit, Hans-Joachim

- 1979 "Qut: Ein Grundbegriff in der zentralasiatischen Religionsbegegnung." In: *Humanitas Religiosa. Festschrift für Haralds Biezais*, Stockholm, pp. 252-260.
1982a *Manichaean Art and Calligraphy*. (Iconography of Religions 20), Leiden.
1982b "Manichaean Kingship: Gnosis at Home in the World." *Numen* 29-1, pp. 17-32.
1993 *Gnosis on the Silk Road. Gnostic Texts from Central Asia*. San Francisco.
1999 "The Significance of the Manichaean Texts in Turkish." In: 『耿世民先生 70 寿辰紀念文集』北京，民族出版社，pp. 225-245.

栗原 益男

- 1971 「安史の乱と藩鎮体制の展開」『岩波講座世界歴史 6（古代 6）』東京，岩波書店，pp. 161-196.

Le Coq, Albert von

- 1912 "Ein manichäisches Buch-Fragment aus Chotscho." In: *Festschrift für Vilhelm Thomsen*, Leipzig, pp. 145-154, +1 pl. (Repr.: *Sprachwissenschaftliche Ergebnisse der deutschen Turfan-Forschung*, Vol. III, Leipzig 1985, pp. 539-548, pl. XXII.)

Mackerras, Colin

- 1972 *The Uighur Empire according to the T'ang Dynastic Histories. A Study in Sino-Uighur Relations 744-840*. Canberra: Australian National University Press.
1990 "The Uighurs." In: D. Sinor (ed.), *The Cambridge History of Early Inner Asia*, Cambridge &c.: Cambridge University Press, pp. 317-342.

前嶋 信次

- 1965 「安史の乱時代の一二の胡語」石田博士古稀記念事業会（編）『石田博士頌寿記念東洋史論叢』pp. 411-423.

護 雅夫

- 1967 「古代トルコ民族史研究 I」東京，山川出版社。
1970 「内陸アジア世界の展開 I 総説」『岩波講座世界歴史 9 中世 3』東京，岩波書店，pp. 3-17.
1972 「突厥帝国内部におけるソグド人の役割に関する一資料——ブグト碑文——」『史学雑誌』81-2, pp. 77-86. (再録：護 1992, pp. 200-215.)
1980 「ふたたび征服王朝について」『月刊シルクロード』6-2, pp. 11-15.
1983 「突厥における君主観」護雅夫（編）『内陸アジア・西アジアの社会と文化』東京，山川出版社，pp. 95-132. (再録：護 1992, pp. 343-383.)
1984 「草原とオアシスの人々」(人間の世界歴史 7)，東京，三省堂。
1992 「古代トルコ民族史研究 II」東京，山川出版社。

Mori, Masao

- 1981 "The T'u-chüeh Concept of Sovereign." *Acta Asiatica* 41, pp. 47-75.

森安 孝夫

- 1977 「ウイグルの西遷について」『東洋学報』59-1/2, pp. 105-130.

- 1979 「増補：ウイグルと吐蕃の北庭争奪戦及びその後の西域情勢について」流沙海西
奨学会（編）『アジア文化史論叢 3』東京，山川出版社，pp. 199-238.
- 1982 「渤海から契丹へ——征服王朝の成立——」『東アジア世界における日本古代史
講座 7 東アジア世界の変貌と日本律令国家』東京，学生社，1982，pp. 71-96.
- 1989 「トルコ仏教の源流と古トルコ語仏典の出現」『史学雑誌』98-4，pp. 1-35.
- 1990 「ウイグル文書笈記（その二）」『内陸アジア言語の研究』5 (1989)，pp. 69-89.
- 1991 「ウイグル=マニ教史の研究」『大阪大学文学部紀要』31/32 合併号全体，248 p. +34
pls., 23 figs., 2 maps. (別刷：京都，朋友書店，1991)
- 1996 「中央ユーラシアから見た世界史」『あうろーら』4，大阪，21世紀の関西を考え
る会，pp. 26-38.
- 1999 「シネウス遺蹟・碑文」森安孝夫・オチル（共編）『モンゴル国現存遺蹟・碑文調
査研究報告』豊中，中央ユーラシア学研究会，pp. 177-195.
- 2000a 「欧州所在中央アジア出土文書・遺品の調査と研究」『東方学』99，pp. 122-134.
- Moriyasu, Takao
- 1981 “Qui des Ouigours ou des Tibétains ont gagné en 789 - 792 à Beš-baliq?” *Journal
Asiatique* 269-1/2, pp. 193-205.
- 2000b “On the Uighur *čxtapt ay* and the Spreading of Manichaeism into South China.” In: R.
E. Emmerick et al. (eds.), *Studia Manichaica. IV. Internationaler Kongreß zum
Manichäismus, Berlin, 14.-18. Juli 1997*, Berlin, Akademie Verlag, pp. 430-440.
- 2001 “Uighur Buddhist Stake Inscriptions from Turfan.” In: L. Bazin & P. Zieme (eds.), *De
Dunhuang à Istanbul. Hommage à James Russell Hamilton*, (Silk Road Studies 5),
Turnhout (Belgium), pp. 149-223.
- 森安 孝夫/A. オチル（共編）
- 1999 「モンゴル国現存遺蹟・碑文調査研究報告」豊中，中央ユーラシア学研究会。
- 森安 孝夫/吉田 豊
- 1998 「モンゴル国内突厥ウイグル時代遺蹟・碑文調査簡報」『内陸アジア言語の研究』
13，pp. 129-170.
- 森安 孝夫/吉田 豊/片山 章雄
- 1999 「カラ=バルガスン碑文」森安孝夫・オチル（共編）『モンゴル国現存遺蹟・碑文
調査研究報告』豊中，中央ユーラシア学研究会，pp. 209-224.
- Moses, Larry W.
- 1976 “T’ang Tribute Relations with the Inner Asian Barbarian.” In: J. C. Perry & B. L. Smith
(eds.), *Essays on T’ang Society*, Leiden 1976, pp. 61-89.
- 村上 正二
- 1951 「蒙古史研究の動向」『史学雑誌』60-3，pp. 45-54.
- 1980 「征服王朝論」『月刊シルクロード』6-2，pp. 6-10.
- Müller, F. W. K.
- 1913 *Ein Doppelblatt aus einem manichäischen Hymnenbuch (Mahnāmag)*. APAW 1912-
5, 40 p. + 2 pls. (Repr.: *Sprachwissenschaftliche Ergebnisse der deutschen Turfan-
Forschung*, Vol. III, Leipzig 1985, pp. 151-190, pls. VII-VIII.)

長澤 和俊

1962 「近年における内陸アジア史の研究動向」『史学雑誌』71-12, pp. 51-68.

岡田 英弘

1990 「中央ユーラシアの歴史世界」護雅夫・岡田英弘(編)『民族の世界史 4 中央ユーラシアの世界』東京, 山川出版社, pp. 1-21.

1991 「中央ユーラシア史の可能性」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』71, pp. 53-58.

1992 『世界史の誕生』(ちくまライブラリー 73) 東京, 筑摩書房。(再刊: ちくま文庫, 1999)

プーリイブランク, E. G.

1952a 「安祿山の出自について」『史学雑誌』61-4, pp. 42-57.

1952-53 「安祿山の叛乱の政治的背景(上・下)」『東洋学報』35-2, pp. 92-111; 35-3/4, pp. 122-147.

Pulleyblank, Edwin G.

1952b "A Sogdian Colony in Inner Mongolia." *T'oung Pao* 41, pp. 317-356.

1976 "The An Lu-shan Rebellion and the Origins of Chronic Militarism in Late T'ang China." In: J. C. Perry & B. L. Smith (eds.), *Essays on T'ang Society*, Leiden 1976, pp. 33-60.

Ramstedt, G. J.

1913 "Zwei uigurische Runeninschriften in der Nord-Mongolei." *Journal de la Société Finno-Ougrienne* 30-3, 63 p. +3 pls.

Röhrborn, Klaus

1996 *Xuanzang's Leben und Werk, Teil 5: Die alttürkische Xuanzang-Biographie VIII*. (Veröffentlichungen der Societas Uralo-Altaica 34-5), Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.

榮 新江

1998 「安祿山の種族と宗教信仰」『北京大学百年国学文粹・史学卷』北京, 北大出版社, pp. 762-769.

Rybatzki, Volker

2000 "Titles of Türk and Uigur Rulers in the Old Turkic Inscriptions." *Central Asiatic Journal* 44-2, pp. 205-292.

佐口 透

1972 「回鶻伝(旧唐書・新唐書)」佐口透他(訳注)『騎馬民族史 2』(東洋文庫 223), 東京, 平凡社, pp. 299-462.

妹尾 達彦

1999 「中華の分裂と再生」『岩波講座世界歴史 9 中華の分裂と再生』東京, 岩波書店, pp. 3-82.

2001 「長安の都市計画」(講談社選書メチエ 223), 東京, 講談社.

庄垣内 正弘

1976 「ウイグル語写本・‘観音経相応’—観音経に関する‘avadāna’—」『東洋学報』58-

1/2, pp. 01-037.

Sinor, Denis

- 1990 "Introduction: The Concept of Inner Asia." In: D. Sinor (ed.), *The Cambridge History of Early Inner Asia*, Cambridge &c.: Cambridge University Press, pp. 1-18.

杉山 正明

- 1992 『大モンゴルの世界』(角川選書 227) 東京, 角川書店。
1993 『世界史と遊牧民』板垣雄三編『世界史の構想』(地域からの世界史 21), 東京, 朝日新聞社, pp. 177-197。
1997a 『遊牧民から見た世界史 民族も国境も越えて』東京, 日本経済新聞社。
1997b 『中央ユーラシアの歴史構図——世界史をつないだもの——』「岩波講座世界歴史 11 中央ユーラシアの統合」東京, 岩波書店, pp. 3-89。

Sundermann, Werner

- 1981 *Mitteliranische manichäische Texte kirchengeschichtlichen Inhalts*. (BTT XI), Berlin, Akademie Verlag.
1984 "Probleme der Interpretation manichäisch-soghdischer Briefe." In: J. Harmatta (ed.), *From Hecataeus to Al-Huwārizmī*, Budapest, pp. 289-316.
1986-87 "Studien zu kirchengeschichtlichen Literatur der iranischen Manichäer, I-III." *Altorientalische Forschungen* 13, pp. 40-92, 239-317; *Altorientalische Forschungen* 14, pp. 41-107.
1992 "Iranian Manichaean Turfan Texts concerning the Turfan Region." In: A. Cadonna (ed.), *Turfan and Tun-huang. The Texts. Encounter of Civilizations on the Silk Route*, (Orientalia Venetiana 4), Firenze, Leo S. Olschki Editore, pp. 63-84.
1996 *Iranian Manichaean Turfan Texts in Early Publications (1904-1934)*. (Corpus Inscriptionum Iranicarum, Supplementary Series Vol. 3), London.

谷川 道雄

- 1954 「『安史の乱』の性格について」『名古屋大学文学部研究論集』Ⅶ, 史学 3, pp. 77-92.

田坂 興道

- 1940 「回紇に於ける摩尼教迫害運動」『東方学報(東京)』11-1, pp. 223-232.

Tekin, Talat

- 1968 *A Grammar of Orkhon Turkic*. (Uralic and Altaic Series, Vol. 69), Bloomington: Indiana University.

Thierry, François

- 1998 "Les monnaies de Boquq qaghan des Ouïgours (795-808)." *Turcica* 30, pp. 263-278.

Tremblay, Xavier

- 2001 *Pour une histoire de la Sérinde. Le manichéisme parmi les peuples et religions d'Asie Centrale d'après les sources primaires*. (Sitzungsberichte der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, Phil.-hist. Klasse, 690), Wien.

Тугушева, Л. Ю.

- 1980 *Фрагменты уйгурской версии биографии Сюань-цзана*. Москва: Издательство

Hayka.

Tuguševa, L. Ju.

- 1996 “Ein Fragment eines frühmittelalterlichen uigurischen Textes.” In: R.E. Emmerick et al. (eds.), *Turfan, Khotan und Dunhuang*, Berlin, pp. 353-359, incl. 1 pl.

Weber, Dieter

- 2000 *Iranian Manichaean Turfan Texts in Publications since 1934*. (Corpus Inscriptionum Iranicarum, Supplementary Series Vol. 4), London.

Wilkens, Jens

- 2000a *Alttürkische Handschriften, Teil 8: Manichäisch-türkische Texte der Berliner Turfansammlung*. (VOHD, Bd. XIII, 16), Stuttgart: Franz Steiner Verlag.
2000b “Ein manichäisch-türkischer Hymnus auf den Licht-Nous.” *Ural-Altäische Jahrbücher*, NF. 16 (1999/2000), pp. 217-231.

矢吹 慶輝

- 1988 「マニ教と東洋の諸宗教」東京、佼成出版社。

吉田 順一

- 1973 「北アジアの歴史的発展とワイトフォークルの征服王朝理論」『遊牧社会史探究』46, pp. 1-7.

吉田 豊

- 1988 「カラバルガスン碑文のソグド語版について」『西南アジア研究』28, pp. 24-52.
1991 「新疆维吾尔自治区新出ソグド語資料——1990年調査旅行報告——」『内陸アジア言語の研究』6, pp. 57-83.
1994 「ソグド文字で表記された漢字音」『東方学報』66, pp. 380-271 (逆頁), incl. 2 pls.
1997 「ソグド語資料から見たソグド人の活動」杉山正明 (編)『岩波講座世界歴史 11 中央ユーラシアの統合』東京、岩波書店, pp. 227-248.

Zieme, Peter

- 1975 *Manichäisch-türkischer Texte*. (BTT V), Berlin.

[補注 1] (本文 123 頁へ)：本稿校正中に、森部豊氏の考えの一端を示す論文が出版された：
「唐前半期河北地域における非漢族の分布と安史軍淵源の一形態」『唐代史研究』5, 2002, pp. 22-45.

[補注 2] (脚注 19 へ)：曳落河問題に関し、陳述「曳落河考釈及其相關諸問題」(『国立中央研究院歷史語言研究所集刊』7-4, 1938, pp. 547-573) という論文が存在し、既に同じような指摘のあることを、森部豊氏より御教示いただいた。前嶋氏も私も見落としていたものであり、興味深い、かなり荒っぽい議論もあるので、利用には注意が必要である。

[補注 3] (第 5 節に引用のカラバルガスン碑文へ)：常塚聡「中国社会におけるマニ教の認識」『(東京大学) 宗教学年報』18, 2001, pp. 89-113 では、ウイグルとマニ教の関係についてカラバルガスン碑文漢文面の一部を和訳しているが、シュレーゲルによって作られた架空のテキストを使うなど、文献学的にみて余りに幼稚である。さらに全体をみても、先学が苦心して集積した漢文史料の誤読が目立ち、また歴史認識も甘く、どうしてこれが『史学雑誌』の「回顧と展望」に取り上げられたのか、理解に苦しむ。